NPO 法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要

niwa 邇波

2021
第 8 号

令和２年度
活動記録

NPO 法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要 第８号

niwa 邇波

目次

令和２年度活動記録

青塚古墳史跡公園 ･････････････････1
木之下城伝承館・堀部邸 ･････････････2
歴史の里・しだみ古墳群 ･････････････3
その他ニワ里ねっと自主事業 ････････4
その他文化遺産関連受託事業 ････････5
活動年表 ･･････････････････････････6

研究論考
大毛池田層と５世紀前半期の光景
赤塚次郎 ･･････････････････････････ 8

歴史余話
虎列刺（コレラ）に斃れた郷土の兵士
ー 西南戦争外伝 ー
服部哲也 ･･････････････････････････14

エッセー
移設された犬山駅
古川博昭 ･･････････････････････････20

資料紹介
上野古墳群出土の須恵器について
望月友恵 ･･････････････････････････25

会員募集 ･･････････････････････････30
Topic News ････････････････････････32

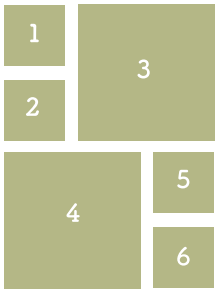
■ 表紙写真　/　中野耕司

青塚古墳史跡公園

活用・管理業務を犬山市より委託を受け実施。青塚古墳の草刈りボランティア作業を年3回実施、地元を中心にのべ186名もの方にご参加いただきました。開館20周年を記念して史跡公園の歩みを振り返る写真展を冬10月に開催。「地域に眠る文化遺産 in ○○」シリーズの企画展は上野遺跡・上野古墳群を取り上げて展示しました。

1. 古墳草刈り活動２月　2. あおつか歴史講座「尾張平野の弥生時代と上野遺跡」　3. 企画展「写真で振り返る青塚古墳」
4. 子ども教室「青塚古墳の笹でハガキを作ろう」　5. 古墳草刈り活動６月　6. 子ども教室「青塚古墳見学会」

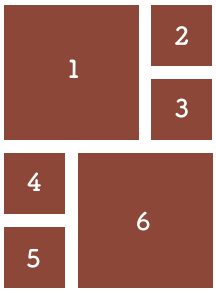
木之下城伝承館・堀部邸



春・夏開催の月津塾は犬山を舞台にした小説「智慧子の四季」の朗読会を催しました。秋には企画展「東之宮古墳と邇波四代の王墓」を開催。関連講座として開催した月津塾では、赤塚理事長が講演、多くの方にご参加いただきました。堀部邸宅内の雰囲気を活かした漆芸品展や歌曲コンサート、講談・落語会なども開催しました。

1.月津塾「智慧子の四季」を読む　2.猪之子座「旭堂南海の上方講談をたっぷり」　3.月津塾「４つの地域社会と４つの王墓」　4.猪之子座「上方落語九雀亭」　5.堀部邸主屋風景　6.猪之子座「2020 日本の芸術歌曲コンサート」

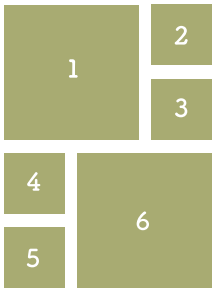
歴史の里・しだみ古墳群



しだみの里守グループの一員として企画運営に携わって２年目。毎月開催の「しだみゅー歴史講演会」は、毎回満員御礼での開催となりました。８月には「夜の音楽会」を開催、昨年度に引き続き包金鐘さんの美声を古墳の前で聴かせていただきました。子ども研究員養成講座や「お庭に埴輪プロジェクト」など子ども向けの事業も企画・実施しました。

1.夜の音楽会 in しだみ古墳群２　2.しだみゅー寺子屋鈴鏡「東谷山と白い石」　3.しだみゅー寄席「古墳 de りんりん」
4.子ども研究員養成講座　5.歴里講座「お庭に埴輪プロジェクト」　6.しだみゅー古墳散策「味美・味鋺古墳群」

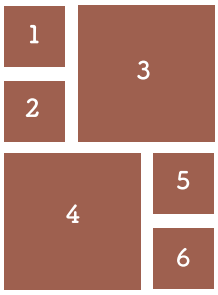
その他 ニワ里ねっと自主事業



バスツアーでは京都府城陽市・京田辺市へ。赤塚理事長の案内のもと、式内社や古墳を巡りました。ウォーキングでは、犬山市大平山古墳群、大垣市上石津の山城などを訪ねました。会員企画のサイクリングでは川島町周辺を走り抜けました。羽黒小図書ボランティアと協働で絵本「いるかいけがきれた」も製作し多くの方に好評をいただきました。

1.バスツアー「栗隈県と大住の里」 2.栗栖地区 試掘調査 3.ウォーキング「大平山の古墳を歩く」
4.サイクリング「木曽川の中洲を走る」 5.絵本「いるかいけがきれた」 6.ウォーキング「上石津の山城を歩く」

その他 文化遺産関連受託事業



今年度は新型コロナウィルスの影響で多くの委託事業が中止となってしまいましたが、年度後半からは少しずつ事業も再開しました。尾張旭市では考古企画展・民具企画展の企画制作を担当しました。養老町・関ヶ原町の「西美濃古代皇族の歩み探訪事業」は、今年度はヤマトタケル 関連地の調査とデータ整理をし、今後は活用事業を実施する予定です。

1.【富加・坂祝・美濃加茂市町】学校歴史講談　2.【犬山市】東之宮古墳散策ツアー　3.【養老町】古代皇族関連地・現地踏査　4.【富加町】考古学落語会　5.【春日井市】古墳消しゴムワークショップ　6.【尾張旭市】民具企画展

19 日：【犬山市】「東之宮古墳冬至の日の出見学」
①赤塚次郎　②東之宮古墳　③ 23 名

19 日：【富加町・坂祝町・美濃加茂市】桂九雀 考古学落語会
①桂九雀　②タウンホールとみか　③ 40 名

1 月

23 日：ニワ里カレッジ「仁所野遺跡の原風景」
①西松賢一郎（大口町教委）②青塚古墳　③ 22 名

24 日：お庭に埴輪プロジェクト
①岩渕 寛（愛陶磁美）ほか　②愛知県陶磁美術館　③ 16 名

30 日：あおつか歴史講座「尾張平野の弥生時代と上野遺跡」
①永井宏幸（愛知埋文セ）　②青塚古墳　③ 20 名

31 日：しだみゅー古墳散策「味美・味鋺古墳群」
①服部哲也（ニワ里）　②春日井市周辺　③ 14 名

2 月

7 日：お庭に埴輪プロジェクト
①岩渕 寛（愛陶磁美）・服部哲也（ニワ里）　②しだみゅー
③ 16 名

11 日：青塚みやげ話「瀬戸内海古代の航路」ほか
①岡本利雄・川村和恵・望月友恵　②青塚古墳　③ 25 名

13 日・17 日・20 日：青塚古墳を見守る会・草刈りボランティア
②青塚古墳　③ 90 名

14 日：あおつか子ども教室「青塚古墳の笹でハガキを作ろう」
①津守道夫（ニワ里）　②青塚古墳　③ 8 組 25 名

21 日：しだみゅー歴史講演会「笹ヶ根古墳群」
①木村有作　②しだみゅー　③ 48 名

25 日～令和 4 年 1 月 31 日：【尾張旭市】考古企画展
「尾張旭 7 城めぐり」

27 日：「しだみゅー meeting ー地域の夢を繋ぐ情報コンテンツー」
①西村誠治（ナカシャ）・中村真咲（名経大）・服部哲也（ニワ里）・和氣清章（松阪市）・赤塚次郎（ニワ里）　②しだみゅー
③ 21 名

28 日：あおつか子ども教室「弥生のもようをデザイン」
①望月友恵（ニワ里）　②青塚古墳　③ 2 組 4 名

3 月

6 日：あおつか歴史講座「防災講演会　過去から学ぶ防災」
①服部哲也・望月友恵（ニワ里）　②青塚古墳　③ 13 名

7 日：【東海古墳時代研究会共催事業】東之宮古墳シンポジウム
「東之宮古墳の研究はどこまで進んだのか」

8 日～ 10 日：栗栖プロジェクト　瀬ノ上遺跡範囲確認調査

14 日：お庭に埴輪プロジェクト
①岩渕 寛（愛陶磁美）、天野麻里絵　②しだみゅー　③ 47 名

21 日：しだみゅー寺子屋鈴鏡「東谷山と白い石」
①足立守（名古屋大学名誉教授）②しだみゅー　③ 49 名

27 日：あおつか歴史講座「上野遺跡を歩く」
①赤塚次郎・服部哲也（ニワ里）　②犬山市周辺　③ 35 名

28 日：【富加町・坂祝町・美濃加茂市】
おうち de 歴史イベント「夕雲の城」・歴史講談
①旭堂南海　② YouTube ライブ配信

そのほか事業

＊【犬山市】青塚古墳史跡公園活用・管理業務（入館者数 10,960 名）
＊【犬山市】青塚古墳パンフレット製作

＊【名古屋市】「歴史の里」しだみ古墳群指定管理（入館者数 83,338 名）
＊【養老町・関ヶ原町】
　西美濃古代皇族の歩み探訪事業　調査・報告活動

＊【大垣市】　山城活用事業支援業務

＊　文化遺産カード製作業務

＊木之下城伝承館・堀部邸管理活用（入館者数 2,313 名）
＊犬山の律令時代遺跡の基礎的研究事業【名古屋経済大学助成】
＊小牧線文化遺産マップ事業【名古屋経済大学協働】
＊絵本「いるかいけがきれた」発行
　【羽黒小学校図書ボランティア協働・犬山市助成金】
＊邇波里ブックレット 003「邇波四代の王墓」発行

散策や講演会など
様々な活動を通して
文化遺産のみえる
まちづくり活動を
行っています！

2020.4 ▶ 2021.3

令和２年度 活動年表

日にち：【委託市町村名】行事名・「タイトルなど」
①講師名（敬称略） ②開催場所 ③参加者数

緑色：ニワ里ねっと自主事業
赤色：文化遺産関連受託事業

4月

新型コロナウィルス感染症拡大予防のため各種イベント中止

5月

16日：ニワ里ねっと総会
②堀部邸

6月

6日：青塚古墳を見守る会・草刈りボランティア
②青塚古墳 ③45名

13日：月津塾・「智慧子の四季」を読む
①酒井麻利子 ②堀部邸 ③10名

21日：しだみゅー歴史講演会「断夫山古墳と味美二子山古墳」
①浅田博造（春日井市教委）、赤塚次郎（にわ里） ②しだみゅー ③84名

27日：猪之子座「上方落語九雀亭５」
①桂九雀 ②堀部邸 ③29名

28日：しだみゅー寄席「古墳 de 九雀亭２」
①桂九雀 ②しだみゅー ③54名

7月

5日：ニワ里カレッジ「過去から学ぶ､地域の防災～入鹿切れ～」
①鈴木 雅（名古屋市博）②青塚古墳③18名

12日：ニワ里カレッジ「坊の塚古墳を知る」
①近藤美穂（各務原埋文セ）②青塚古墳 ③31名

16日：堀部邸歴史文化会「司馬遷の史紀の見所」
①山田茂樹（ニワ里）②堀部邸 ③7名

19日：しだみゅー寺子屋鈴鏡「尾張氏と山田郡志談郷」
①早川万年（元岐阜大）ほか ②しだみゅー ③54名

24日：あおつか子ども教室「小牧長久手の戦いすごろくをつくろう」
②青塚古墳 ③2組5名

29日：しだみゅー子ども研究員養成講座
①服部哲也（ニワ里） ②しだみゅー ③16名

8月

5日：あおつか子ども教室「古墳見学会」
②青塚古墳 ③4組11名

8日：月津塾「智慧子の四季」を読む
①酒井麻利子 ②堀部邸 ③10名

12日：しだみゅー子ども研究員養成講座
①服部哲也（ニワ里） ②しだみゅー ③16名

15日：あおつか子ども教室「古墳見学会」
②青塚古墳 ③7組22名

19日：堀部邸歴史文化会「楽田の未発掘古墳について」
①安藤芳春 ②堀部邸 ③10名

22日：あおつか子ども教室「1/5の青塚古墳を描こう」
②青塚古墳 ③4組10名

23日：しだみゅー歴史講演会
「帆立貝式古墳を楽しむ 国史跡乙女山古墳」
①吉村公男（河合町教委） ②しだみゅー ③49名

29日：夜の音楽会 in しだみ古墳群 包金鐘コンサート
①包金鐘ほか ②しだみゅー ③400名

9月

5日：ニワ里カレッジ「濃尾平野北部の古墳」
①早野浩二（愛知県埋文セ） ②青塚古墳 ③25名

16日：堀部邸歴史文化会「青銅鏡の見方」
①宮崎憲二 ②堀部邸 ③14名

19日：【犬山市】東之宮古墳散策ツアー
①赤塚次郎（ニワ里） ②東之宮古墳周辺 ③18名

20日：しだみゅー歴史講演会
「帆立貝式古墳を楽しむ 国史跡免鳥長山古墳」
①赤塚次郎 ②しだみゅー ③56名

26日：青塚古墳を見守る会・草刈りボランティア
②青塚古墳 ③50名

10月

3日～11月1日：堀部邸秋の企画展
「東之宮古墳と邇波四代の王墓」
②堀部邸

3日：月津塾「東之宮古墳を支えた二つ部族」
①赤塚次郎（ニワ里） ②堀部邸 ③47名

6日～11月1日：青塚古墳史跡整備20周年写真展
②青塚古墳

10日～令和3年9月30日：【尾張旭市】民具企画展
「70's 尾張旭市が生まれた頃」
②スカイワードあさひ

11日：ニワ里ウォーキング「大平山の古墳を歩く」
①服部哲也（ニワ里） ②大平山界隈 ③10名

16日～25日：「漆＋空間 at 堀部邸ー浅井啓介漆芸展ー」
②堀部邸

17日：「マイ箸づくり」
①浅井啓介（漆芸家） ②堀部邸 ③6名

18日：しだみゅー歴史講演会
「帆立貝式古墳を楽しむ 白鳥塚古墳」
①藤原秀樹（鈴鹿市教委） ②しだみゅー ③54名

21日：堀部邸歴史文化会「三角縁神獣鏡の基礎」
①宮崎憲二 ②堀部邸 ③15名

24日：アコースティック LIVE
①ポチ ②堀部邸 ③40名

31日：しだみゅー古墳散策「高御堂古墳・天王山古墳ほか」
①浅田博造（春日井市教委） ②しだみゅー ③23名

11月

1日：月津塾「４つの地域社会と４つの王墓」
①赤塚次郎（ニワ里） ②堀部邸 ③47名

3日：ニワ里カレッジ「夕田茶臼山古墳」
①島田崇正（富加町教委）②青塚古墳 ③17名

7日：【春日井市】古墳消しゴムワークショップ

8日：しだみゅー秋まつり
②しだみゅー ③3,155名

15日：しだみゅー寺子屋鈴鏡「帆立貝式古墳とは何者なのか」
①早野浩二（愛知県埋文セ） ②しだみゅー ③69名

18日：堀部邸歴史文化会
①岡本利雄 ②堀部邸 ③12名

21日：ニワ里バスツアー「栗隈県と大住の里」
①赤塚次郎（ニワ里） ②京都府城陽市・京田辺市 ③16名

23日：ニワ里サイクリング「木曽川の中州を走る」
①古川博昭 ②川島町周辺 ③7名

26日・27日：【富加町・坂祝町・美濃加茂市】学校講談

28日：猪之子座「旭堂南海の上方講談をたっぷり６」
①旭堂南海 ②堀部邸 ③25名

29日：猪之子座「2020日本の芸術歌曲コンサート」
①長江希代子ほか ②堀部邸 ③61名

12月

2日～令和3年3月28日企画展「地域に眠る文化遺産 in 犬山西」
②青塚古墳

5日：ニワ里ウォーキング「上石津の城を歩く」
①ニワ里スタッフ ②大垣市上石津町 ③6名

6日：しだみゅー寄席「古墳 de りんりん」旭堂鱗林・歴史講談の会
①旭堂鱗林・柳家三亀司 ②しだみゅー ③46名

12日：あおつか歴史講座「木曽川流域の後期古墳群」
①森島一貴（関市文化財保護セ） ②青塚古墳 ③25名

12日：【ミラマチ栗栖協同事業】親子で星座撮影会in栗栖
①鎌田祐一（星天カメラマン） ②栗栖野外活動センター ③10組32名

16日：堀部邸歴史文化会「円窓付土器について考える」
①伊藤宏樹 ②堀部邸 ③10名

大毛池田層と5世紀前半期の光景

NPO法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
赤塚　次郎

1　はじめに

幾内の主要な前方後円墳動向を概観すると、まず古墳時代前期を通じて見られた奈良・大和盆地の大型前方後円（方）墳の造営が、4世紀末葉になり大阪平野・河内に移動したかのような動きが見られる。早くから指摘されてきたこの大きな動きは、幾多の研究者が指摘し、これを政権が動いたと理解するか、造営地の移動という現象に過ぎないと捉えるかという二者に分かれ議論が続けられてきた経緯がある。まずもって古墳造営とはいかなるものかという視点そのものが揺らいでいたためでもあろうが、現状においてもとても気になる現象である点は変わりない。白石太一郎は「古墳は本来その被葬者の本貫地に営まれるものと考えており、こののち、少なくとも5世紀代には引き続いて王墓が大阪平野南部に営まれることからも、これは大阪平野南部の南河内ないし和泉の勢力が、王権を掌握した結果に他ならない」と明言している。松木武彦は「4世紀後葉になると、日本列島の古墳の築かれ方に大きな変動が生じた」とし奈良盆地東南部に限られていた巨大古墳の営みが各地に分散しはじめ、「それまでそこに墳墓を集めてきたサミットのメンバーたちが、この世代以降はそれぞれの本拠地にみずからの古墳を営みはじめた」・「帰郷」が始まったと考えている。興味深い視点であるが、いずれにせよ時代を動かす主導的立ち位置を得た集団が分散・変化移動したというおおかたの方向性で暗々裏に一致しているようにも見える。加えて都出比呂志が指摘し位置付けた、畿内中央の勢力の交代がそのまま地方の首長系譜の変化にあらわれ、地方レベルの勢力の変動を呼び起こしているという考え方は、現在もかなり支持を得ているように思え、地域社会での造墓活動の盛衰を、この解釈に重ねて評価する見解が多く見られるようだ。

400年前後を境にして造営地が大きく変動する、あるいは古墳造営が収束するような現象は列島各地で報告されている。尾張地域の動向もまさに同じ方向性にあると言っても良い。具体的に見れば、木曽川中流域での活発な大型古墳の造墓活動が、4世紀末葉から5世紀前葉にかけて終息し、変わって庄内川・名古屋台地周辺での活発な造営活動が確認されるようになる。見事に畿内大型墳の画期と軌を一にする動きのようにも思えてくる。

こうした列島の古墳時代を二分するかのような大きな動きをどのように理解したら良いかという視点で、改めて尾張平野北部の遺跡・古墳の大きな動きをまずは確認し、そこに見えてきた環境変動との関係を推論してみたい。

図1　大毛池田遺跡の水田（報告書）

2　「大毛池田層」について

愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査で、大変興味深いイベントが報告されている。平成5年から8年度にかけて実施された東海北陸自動車道路一宮北インター予定地内での大規模な発掘調査により、古墳時代の水田およびその関連遺構群が見つかっている。その内容は以下の4点に整理される。

1．標高8メートル前後において大きく上下（4・5層）二つの水田堆積層が確認できている。

2．5層の水田開発から4層の洪水による水田埋没までの間。概ね3世紀から4世紀（廻間Ⅱ式から松河戸Ⅱ式）と確定。

3．水田の埋没時期は松河戸Ⅱ式後半期、2～10センチメートルのシルト・砂層が覆う。洪水層（大毛池田層）を確認。

4．水田耕作地は放棄されてから6世紀後半に到るまで明確な遺構は確認できない。

以上のように水田開発は廻間Ⅱ式からⅢ式期にかけて大規模な生産活動が行われ、松河戸Ⅱ式期の終わり頃に大規模な洪水により被災し、放棄された空域が存在した。水田跡ではイネ植物珪酸体が多量に検出されており、稲作が行われたことが検証されている。また水田土壌の理化学分析の結果からは「水田の形態は表面水型水田（乾田）であった」可能性が指摘されている。

本遺跡が所在する場所は、後に尾張国葉栗郡大毛郷に位置するが、3・4世紀において大規模な水田耕作地が展開していた事が明らかになり、加えてそれらの活発な活動を一気に停止する出来事（大洪水）が勃発していた点が分かってきた。そこに認められたのは災害「洪水」イベントの痕跡（堆積学的な評価からも洪水による短期間の堆積）であるが、その時期を出土土器から特定できる成果も報告されている。

洪水性の堆積、砂層にパックされた一群の土器が確認されており、一括性の高い資料として、土器の特徴から松河戸Ⅱ式期に所属しその後半段階の資料群と見て間違いなかろう。そこで、大毛池田遺跡を襲った洪水性の出来事を「大毛池田層」と呼び、その時期を「松河戸Ⅱ式期後半」と評価しておいた。

3　松河戸Ⅱ式期環境変動の軌跡

さて、大毛池田層の存在を前提として、その後の調査成果を概観すると興味深い遺跡がいくつか見えてくる。特に北名古屋市の中之郷北遺跡の成果は最も注目すべき内容をともなっている。少し詳しく見てみたい。

愛知県埋蔵文化財センターによる調査成果からは、洪水性の堆積層とする「Ⅲ層」が広範囲に確認（数十センチから1・5メートル前後、再開発による砂層の除去などを考慮すると概ね1メートル前後の堆積が推測できる）でき、その下層（Ⅳ層）からは4世紀後半から5世紀前半期の土器が見つかっている。何と現在の地盤から3メートル下において古墳時代中期の生活面が確認されているのである。

驚くべき発見であるが、周辺の地形が激変したことを示している。清須市の朝日遺跡の遺構面は概ね2・5メートル前後であり、そこから北に4～5キロメートルまでほとんど大きな起伏もなく同様な平坦面が広がっていたことになる。また現在の岩倉市南部の遺跡における同時代の遺構検出面は、現在の地表下数十センチメートルであり、標高約5・6メートルとなる。僅か1キロメートルの間に2から3メートルの標高差が存在していた事になる。どうやら現在の五条川「大曲」を挟んで南北に大きな高低差が存在していた可能性が高い。これはどういう地形的・地質的な要因なのかとても気になる点である。現在の地形、景観とは大きな違いが見られるようだ。五条川の異常な「大曲」や丹羽・春部郡の群界、また岩倉市南部は縄文中期以来、人が集まる場面として濃尾平野の中では特筆すべき地域である点などを含め、この場所・場面の総合的な再検討が必要である。

そこにある時点において一気に洪水性の堆積が始まり、現在の北名古屋市域から清須市域北部にかけて砂層が堆積し、地形が大きく変化していたことになる。中之郷北遺跡Ⅳ層出土遺物の早野浩二による分析からは、松河戸Ⅰ式およびⅡ式土器の細分化が提示されており、砂層直下の土器群は松河戸Ⅱ式1段階（Ⅳa層）および、Ⅱ式2段階の資料が見つかっている。調査地点の成果を加味すると、大規模な洪水性の堆積期は松河戸Ⅱ式2段階の中に位置付けられるものと推定したい。この見解に基けば、中之郷北遺跡で見つかっている砂層Ⅲ層は、「大毛池田層」と

した砂層堆積そのものの可能性が高いと推察できよう。

4　誘発された洪水多発化現象

以上、松河戸Ⅱ式期における「洪水層」が濃尾平野葉栗郡から中島・春部郡にかけて大きな影響を与えたことは想像に固くない。それは古代の文献資料が示す木曽川水系での度重なる反乱と甚大な被害記録を彷彿させる出来事であった。大毛池田層により、大毛遺跡加えて中之郷北遺跡における居住空間・耕作域が一時生産活動が停止した事は間違いない事実であった。後

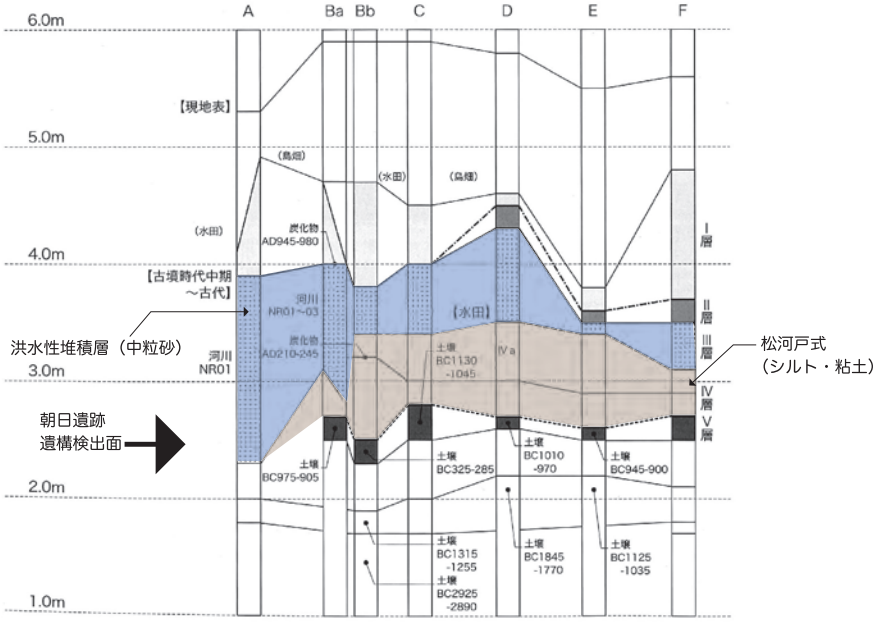


図２　中之郷北遺跡土層（報告書に加筆）

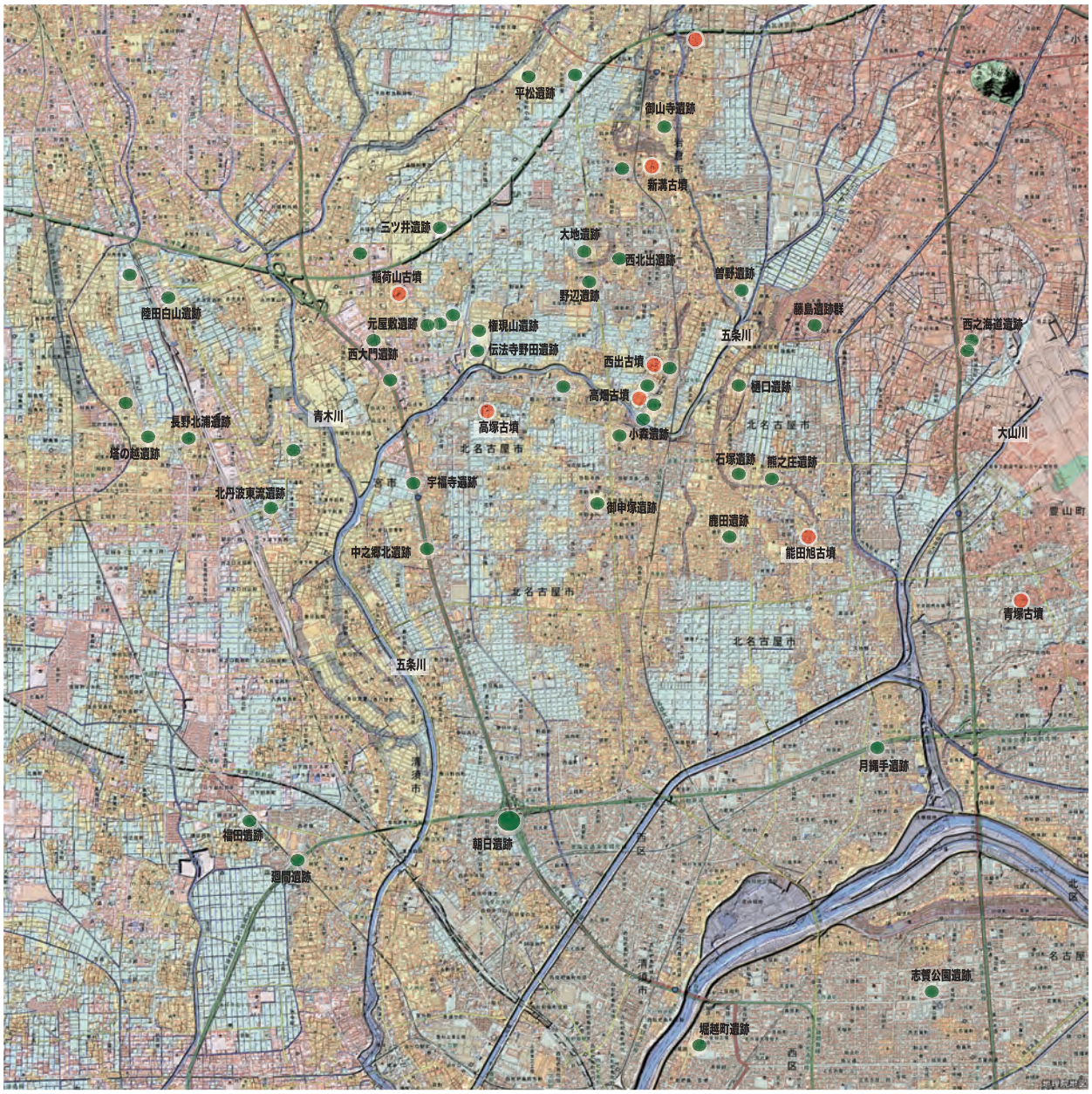


図３　春部郡遺跡分布図

の葉栗郡から中島・春部郡域の広い範囲にかけての洪水災害が起こり、甚大な被害を被った地域社会が推定できる。犬山扇状地においても（丹羽郡）松河戸Ⅱ式から宇田Ⅰ式にかけての遺物は希薄であり、大規模な開発・集落域の存在など人・集落の移動やその盛衰において顕著な現象は認められない。

清須市の朝日遺跡標準堆積層Ｕ層と呼んだ砂層が存在する。概ね宇田式期を中心とする洪水性の砂を含むシルト層の堆積であるが、この標準堆積層を理解する上で注目したいのが、名古屋市北区の志賀公園遺跡の成果である。1メールにも及ぶ洪水性の砂層の堆積が見られ、概ね宇田Ⅰ式期からの多発した洪水性砂層堆積であると評価されている。どうやら松河戸Ⅱ式2段階に始まった大毛池田層の洪水性堆積が起因となり、小河川や自然堤防などの複雑な地形の再編がこの地に出現したようだ。ほとんど制御不能な水による自然災害が多発化し始めた事をこれらは表しているものと考えておきたい。また尾張平野部での調査成果を概観すると、当該期以外の地層で、1メートル前後の砂層の堆積層は確認されていない。

なお朝日遺跡では大きな空白期を挟み5世紀後半期になり墳墓の造営が単発的であるが開始される。また志賀公園遺跡では7世紀になり漸く人々の営みが再開されていく。

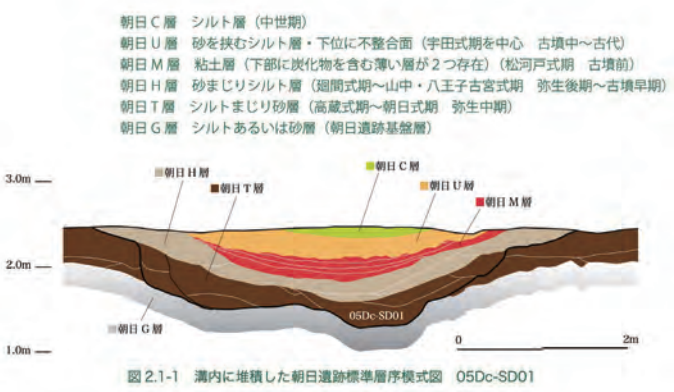


図４　朝日遺跡標準層位（報告書より）

5　尾張平野北部域の古墳動向

では古墳造営に関してはどうであろうか。まず濃尾平野の大型前方後円（方）墳の基本的な変遷を概観すると、前述したように明らかに4世紀末ごろを境として造営環境が大きく変化している事は明白である。具体的には犬山扇状地における東之宮古墳から始まる大型前方後円（方）墳の造営が、妙感寺古墳の造営を機に終焉する。また小規模な古墳群の動向を概観しても、4世紀末葉から5世紀前半期にかけて活発な造営活動が見られる地域は認め難い。今伊勢車塚古墳を代表とする一宮市今伊勢古墳群の動向も概ね４００年前後で造営を停止する。また庄内川水系においても大型の円墳を中心とした造営基盤もこの時期を境にほとんど動きが認められない。

もう少し細かく見ていくと例えば、犬山扇状地においては新たに数カ所で小規模な古墳造営が確認できる。江南市域では宮後南大塚古墳や前野天満社古墳、また山尻地区などの出土遺物群である。その評価からは5世紀中頃から6世紀にかけて、にわかに古墳群が造営されはじめていく様子が見えてくる。つまり大きく見れば東山11号窯式を大きく遡るような時期に、活発な古墳造営あるいは集落遺跡の拡大などの現象は見られないと言ってよい。

以上ここで5世紀前半期を大きく捉え直すとすれば、中之郷北遺跡で確認されているような、災害後に大きく変化した景観に単発的で小規模な居住空間の営みが、まず開始されようとしていた。名古屋市志賀公園遺跡の砂層堆積層下で検出された古墳時代の墳墓や祭祀場は、松河戸Ⅱ式2段階から宇田Ⅰ式期に限定でき、その前後には人為的な営みはほとんど認められない。継続される洪水性の砂堆積が落ちつく7世紀になり集落景観が再び出現するのである。こうした遺跡のあり方を概観すると、松河戸Ⅱ式2段階からの頻発する洪水を引き起こす空域が存在し、そこでは一過性の宗教的な営みが実施されたと思われる。類似する遺跡としては北名古屋市の高塚古墳や能田旭古墳などの単発的な古墳造営も含めてよかろう。また5世紀前半期と考えられる一宮市馬見塚遺跡Ｂ地点での祭祀遺跡なども注目したい。この空域には点在する祭祀遺構や墳墓などは存在するが、継続性のある、ある意味落ち着いた集落景観は見えてこない。

まとめてみると、尾張平野ほぼ全域に大毛池田層および同時期多発したであろう洪水災害により、壊滅的な影響を受けた地域社会が存在し

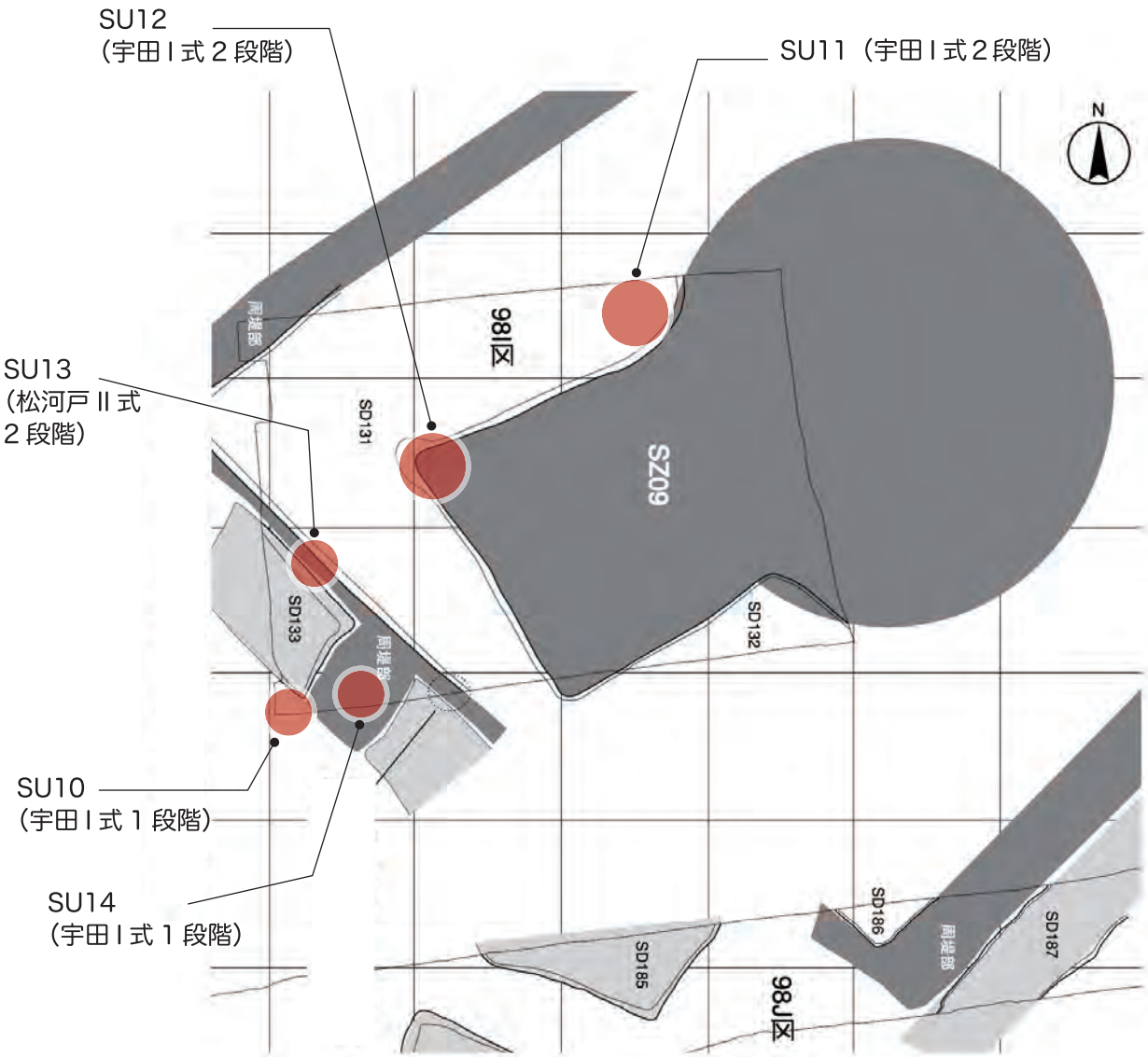


図５　志賀公園遺跡SZ09（報告書に加筆 10mメッシュ）

た。残されたものたちは僅かな空域に新しい生活空間を立て直そうと試みるが、大規模な開発へとは発展できず生活の営みは継続されず終息する。地域社会復興への願いは遠く、その環境を打破するにはほぼ５世紀中頃、東山11号窯式・ＴＫ23型式期段階まで待たねばならなかった。

その一方で、この時期になって新たに造営地を設定し、継続的な造墓活動を開始する注目すべき地域も認められる。最も重視したいのが庄内川中流域の味鋺・味美地域である。彼らは地域復興への手掛かりを何処に見出したのであろうか。

６　宇田Ⅰ式期の風景

早野浩二によれば、濃尾平野への鉄器生産技術の移植は「中之郷北遺跡や福田遺跡の事例から、松河戸Ⅱ式、つまり５世紀前半に一つの画期が求められる」とし、新たな技術およびそれらを習得した職人集団などが東海地域においても一定程度流入を開始した時期と評価してよい。ここではさらに平野部での災害現状が、壊滅的な被害を受けた耕作地、あるいは刻々と変化する河道やそれに伴う微高地の新たな形成といった地形変動が大きく起こり、そうした空域の開発をする手立てとして新らしい技術および集団を呼び込む素地を作り上げていたと考えたい。それは次なる地域社会への新たな出発点という視点を内包していたと思われる。松河戸Ⅱ式の大毛池田層による災害後の宇田Ⅰ式期の時代は「倭の五王」の世紀でもあり、新しい大陸系の文物が流入し、人的交流も活発化しようとする時代でもあった。

ところで宇田Ⅰ式期に特徴的に出現するモノがある。その一つに「帆立貝式古墳」と呼ばれる墳墓の形態がある。この形式の墳墓はさまざまな先行研究が行われているのであるが、ここでは少し異なる観点から見てみよう。まず大毛池田層による甚大な被害を被った後の春部郡内では単発的な墳墓が営まれた。北名古屋市の能田旭古墳の帆立貝式古墳、さらに注目したいのが志賀公園遺跡の

SZ09帆立貝式古墳（推定50メートル）であろう。特に後者は前方部側で複数の祭祀場が見つかっており、その後の洪水性の砂層により見事にパックされた状態の良好な遺物群が発見されている。どうやらこれらには地域の災害、人智を超えた現象への深い祈りが含まれていたと推測したい。同様に河川での祭祀場など、集落遺跡とはかけ離れた場面での祈りの場の創設は、当該期で最も切実な問題への対処だったと想像したい。被災した故郷の復興に果敢に挑む英雄やその仲間たちを英霊として祭り、その場面に祭壇場所を創設したのが帆立貝式古墳であり、その形そのものに祈りの場（低く短い前方部）を含む思想が反映されたものではないかと推論したい。

帆立貝式古墳の形態は、先行研究でも指摘されているようにまさに多様であり一つの規範に基づく設計とは理解するのは難しい。部族社会が規範とした重要な祭り、時に山や河、峠や群界、水害や火山などへの畏敬の念を表現する場面として帆立貝式古墳、あるいはそれを体現した人物が位置付けられる場合も想定できるかもしれない。なお尾張地域での帆立貝式古墳は、ほぼ同様な方向性を保ち、特に前方部を西向きに置く思想が貫かれており注目したい。

7　尾張氏登場へのストーリー

尾張平野には一旦リセットされた空域が存在した。大毛池田層に代表されるような松河戸Ⅱ式期に勃発し、その後の宇田Ⅰ式期にかけて多発した洪水現象である。犬山扇状地から尾張平野低地部にかけて集落遺跡が激減し、単発的・波状的な人の営みへの挑戦が繰り返された。その間に自然災害は容赦なく人々を苦しめ、一筋の平穏への道程は遙か遠のいて見えたに違いない。宇田Ⅰ式期である5世紀前半期においては、こうした風潮が広く平野部に浸透し始めており、その中で復興に果敢に挑む英雄や地の神を祀る場面が重視されていった。それを表現する空間として祭祀場を重視した「帆立貝式古墳」が登場する素地が出来上がってきたものと推測したい。このような時代に新しい氏族の登場や外来的な技術集団を受け入れ、閉塞的な空域の打破を目指す地域社会が新たに登場する。

この後にこの空域における覇権は、結果的に「尾張氏」に掌握されていくのであるが、その過程において幾つかの拠点的な集落基盤が新たに築かれていった。その代表的なものが庄内川中流域の味鋺・味美地域である。ここでは白山藪古墳から始まる古墳造営の系譜が認められ、5世紀から6世紀前葉にかけて小規模な墳墓も混じえ集約した活発な古墳造営が実現した。尾張氏の定着と繁栄をこの遺跡動向から推論したい。また名古屋台地上の金山駅周辺地区などに見られる集落遺跡の動向や山崎川水系での窯業生産活動などの先進的な技術の移植とその定着に躍動する地域の再生産活動の再開が認められる。その多くの事例に後の尾張氏が大きく関わっていた事は考古学的な調査などにより明らかになりつつある。

5世紀前半期の評価や大型墳造営地の移動現象などは、今一度地域に即して集落遺跡を巻き込んだ解釈が必要であろう。尾張平野で概観したような洪水イベントによる集落遺跡の消滅・移動が確認されている地域としては、矢作川水系中流域の豊田市挙母盆地があげられると思うが、ここではひとまず松河戸Ⅱ式2段階という時代の画期を確認するに留めておきたい。

【参考文献】

都出比呂志　1988「古墳時代・首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』22号

武部真木編　1997『大毛池田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第72集

早野浩二編　2006「中之郷北遺跡」『島崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第139集

永井宏幸編　2000『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第90集

赤塚次郎編　2009『朝日遺跡Ⅷ総集編』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第154集

赤塚次郎　2010「東海地域における土器編年に基づく弥生・古墳時代の洪水堆積層と暦年代」『考古学と自然科学』vol・61　日本文化財科学会

松木武彦　2011『古墳とはなにか』角川選書493

白石太一郎　2013『古墳から見た倭国の形成と展開』啓文舎

赤塚次郎編　2020『帆立貝式古墳とは何者なのか 東海編』第2話寺子屋鈴鏡　しだみゅー歴史講演会

虎列刺（コレラ）に斃（たお）れた郷土の兵士
ー西南戦争外伝ー

NPO法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
服部　哲也

はじめに

2021年4月現在、世界を襲った新型コロナウィルスはいまだに衰えをみせず、日本もまたその渦中にある。亡くなった方は世界で300万人を超え、日本でも1万人に達してしまった。政府は新たな時代の始まりを強調し、「新しい生活様式」なるものを唱える。しかし、歴史を振り返れば、幾度となく感染症は人々を襲ってきたのであり、感染症との戦いの繰り返しは、人類の歴史そのものともいえよう。「新しい」のは病原体の種類なのであり、けっして「新しい時代」が到来したわけではない。

ニワ里ねっとでは、歴史の痕跡を現在の暮らしに生かすことを「文化遺産の見えるまちづくり」と標榜して実践しているが、このコロナ禍にあって「地域の感染症の歴史」に注目することもまた重要な視点であることに気づかされた。ここでは西南戦争を調べる過程で知った、明治時代の感染症「虎列刺（コレラ）」と、それに罹患した郷土から出征の兵士について紹介しておきたい。

神になれなかった兵士

西南戦争にて戦死した兵士の記録は『靖国神社忠魂史』「第四篇　西南の役」（註1）に詳しいが、出身地の郷土誌や、建立された忠魂碑にも戦死兵士の名が掲載されたり刻まれたりしている。ところが、地域の郷土誌や忠魂碑には『靖国神社忠魂史』に掲載がない戦死者名を散見することになる。たとえば、現在愛知県護国神社内に移されている『戦死者之碑』（明治11年建立。元は幅下門近くの招魂社にあった）には、名古屋鎮台から出兵した285人が「戦死者」として刻まれているが、『靖国神社忠魂史』にはそのうちの80人の掲載がない（註2）。名古屋鎮台では戦死者とされる実に28％の兵士が英霊（＝国の正式な戦死者）にはなっていないのである。いわば「神になれなかった兵士」であり、この存在がとても気になっていた。

西南戦争での死傷者数を正確に把握することは難しいが、政府軍については戦死者6843人、負傷者9252人（新編西南戦史による）とされている。病死者についての数字はないが、多くの傷病者が搬送されてきた大阪陸軍臨時病院では、負傷者5990人に対して内科患者も2579人と、非常に高い数字の記録が残る（註3）。さらに、ある兵士の治療症例を「大阪鎮台病院格列羅治験録」よりみれば、①4月12日熊本にて「右股被弾」負傷→②長崎海軍病院に収容→③9月16日大阪陸軍臨時病院に転院→④9月19日「肺気」発症→⑤10月13日「コレラ」発症と、銃創治療中に病気も発症していることが分る（註4）。幸いこの兵士は「10月28日にはコレラ治する」と助かったようであるが、こうした傷の治療中に病魔にも侵され、結果「病死」となった兵士も多かったと思われる。「神になれなかった兵士」は、死亡診断が「病死」となった兵士ではなかろうか。そして、その時に流行った病こそ「疫病コレラ」だったのである。

西南戦争と虎列刺（コレラ）

西南戦争は、明治維新後最大かつ最後の内戦であり、その戦いは明治10年（1877年）2月から9月までの約7か月間に及んだ。薩摩軍は西郷隆盛を総指揮に約13000の兵にて鹿児島を出発。途中協力諸隊を合わせ30000人に膨れ上がって北上した。

対する明治政府は明治6年までに、直属軍隊である鎮台を仙台、東京、名古屋、大阪、広島、熊本に設置し、明治8年には歩兵連隊も各地に駐在させていた。また、明治6年には鎮台毎に徴兵制も実施し、平民を兵士（鎮台兵）として鍛えてもいた。西南戦争開戦前は、近代陸軍の基礎固めを終えていたところと言えよう。西郷挙兵を受け、すぐさま各軍隊を旅団に再編成し、約60000の兵を次々と九州に上陸させたのである。

そして、その内戦の最中、「疫病コレラ」もまた九州に上陸するこ

ととなる。当時コレラは「虎列刺」「格列羅」など多くの漢字が当てられた他、あっという間に死に至ることから「虎狼痢（コロリ）」とも呼ばれていた。流行は江戸時代後期（19世紀代）にも数度あったが、明治10年（1877年）9月8日に中国の厦門（アモイ）から長崎へ上陸したイギリス船より再度の流行が始まる。実は、政府は既に7月、中国厦門でのコレラ流行情報を入手しており、8月には「虎列刺病予防法心得」を通達し、コレラ患者が出た場合に隔離収容する避（ひ）病院を外国船の入る港に設置するなど手配していた。その中には最も肝要な外国船の検疫ももちろん入っていたのであるが、イギリス公使に反対され実施できなかった。不平等条約による治外法権の結果である。コレラは瞬く間に九州全土に広がり、西南戦争を戦っていた兵士らも病魔に一気に飲み込まれたのである。

西南戦争の終結は西郷隆盛が鹿児島の城山にて自決した9月24日であり、28日には各軍隊に帰還命令が下る。そして、早くも9月30日には神戸へ帰還部隊が入港する。ところが、上陸の検疫に際しては、外国船の長崎入港と同様の失敗を繰り返すこととなる。既に船内にて多数のコレラ発症者がいたこともあり、医官は先の「虎列刺病予防法心得」に従って、上陸を禁止して検疫と避病の処置を試みようとした。しかし、九州で軍から帰還を命じられていた兵隊が医官の言を聞くはずもなく、かえって罵倒し、先を争って上陸した（註5）。軍と医との治外法権ともいえよう。結果、瞬く間にコレラは神戸の市中に広がり、300余人もの感染者を出す。さらに東上した汽車内や移動中でも感染した帰還兵が明らかとなり、京都や大津で隔離して避病院に収容することとなった。この事態を受けて、さすがの軍もあわてる。10月3日には凱旋部隊帰還の一時凍結と感染兵士の隔離を通達し、ようやく帰還兵からの感染拡大が抑えられることとなった（註6）。こうした港での水際対策の難しさは、今回のコロナ禍にあっても露呈した。横浜港に到着したクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」の顛末を思い返さずにはおられない。

結局、この年のコレラ感染者は約13800人、死者約8000人（死亡率58％）を数えた。そして、西南戦争政府軍兵士でのコレラ発病者は2136人、死者1068人（致死率50％）と報告されている（註7）。全国のコレラによる死者約8000人のうち、約1000人が西南戦争を戦った政府軍兵士だったのである。

コレラに斃れた郷土の兵士

尾張地区で徴兵された兵士は、名古屋鎮台（第6連隊）へ入隊するが、西南戦争に参加した尾張地区出身の兵士は鎮台兵には限らない。近衛兵（天皇を警衛する部隊兵。精鋭古参の兵士が多い）や警察からの出征もある。『靖国神社忠魂史』に掲載のない兵士については、愛知県護国神社内に移されている『戦死者之碑』、各地区に残る『忠魂碑』、そして郡誌や町村誌史などの『郷土誌』を丹念に比較し対照するより他ない。結果、現在、出身地が尾張と確認できた戦死者は59人であり、そのうちの13人は『靖国神社忠魂史』に掲載がない「神になれなかった兵士」である（表1）。これら「神になれなかった兵士」に共通する点は、①病院での死亡（11人中の10人）。②終戦後の死亡（11人中9人）であり、やは

表1　尾張出身の「神になれなかった兵士」

名前	出身地	所属	階級	死亡日	死亡場所	墓地	文献・碑
安達文左衛門	久保一色村	名古屋鎮台	兵卒	明治10年10月10日	西京虎烈刺病室	真田山陸軍墓地・真福寺	東春日井郡誌・戦死者之碑・真福寺墓碑
西尾鎌次郎	大草村	名古屋鎮台	兵卒	明治10年9月1日	大分郡鶴崎病院	松栄山軍人墓地	東春日井郡誌・戦死者之碑・福厳寺墓地碑
河田忠右衛門	野口村	名古屋鎮台	兵卒	明治10年10月5日	障子川木病院	祇園洲官軍墓地	東春日井郡誌・戦死者之碑・官軍墓地碑
加藤竹三郎	新居村	名古屋鎮台	兵卒	明治10年9月24日	細島陸軍臨時病院	真田山陸軍墓地	東春日井郡誌・戦死者之碑
宮田小六	庄内村	不明	伍長	明治10年4月15日	肥後国猫の岸	不明	西春日井郡誌・清洲公園内碑
日高忠次(二)	杉出町	名古屋鎮台	伍長	明治10年10月2日	神戸虎烈刺病室	真田山陸軍墓地	戦死者之碑・清洲公園内碑
伊藤嘉蔵	西五城村	近衛歩兵	兵卒	明治10年11月10日	大阪臨時陸軍病院	真田山陸軍墓地	真清田神社内碑
林松次郎	片原一色村	名古屋鎮台	兵卒	明治10年10月10日	鹿児島陸軍病院	祇園洲官軍墓地？	戦死者之碑・真清田神社内碑
澤田久三郎	竹腰村	名古屋鎮台	兵卒	明治10年10月13日	鹿児島陸軍病院	祇園洲官軍墓地？	真清田神社内碑
佐藤鯛之助	小茂井村	別働歩兵	兵卒	明治10年9月●日	大阪臨時陸軍病院	真田山陸軍墓地	
杉山宗義	巾下●村	東京鎮台	軍曹	明治10年10月2日	不明	真田山陸軍墓地	
伊●●●	名古屋●	不明	軍曹	明治10年10月11日	西京虎烈刺病室	真田山陸軍墓地	
安井惣三郎	小碓村	名古屋鎮台	兵卒	不明	不明	不明	愛知郡誌

り「終戦後の病死者」であった可能性が高い。さらに感染病コレラで亡くなったと思われる、現在の小牧市から出征した二人の兵士について見てみよう。

安達文左衛門の場合

「明治10年10月10日　凱旋途中京都府陸軍避病院に於て死亡　味岡村陸軍兵卒」（『東春日井郡誌』）

安達文左衛門は、愛知県護国神社内の『戦死者之碑』にその名をみることができるので、名古屋鎮台歩兵第6連隊所属である。討伐軍で所属した旅団は不明のため、九州での戦歴は確認できないが、いづれにしても西郷軍との厳しい戦いを生き残り、凱旋の途につけたのである。ところが、神戸への船中か神戸からの列車中にて発症し、ついには京都にて強制隔離させられてしまう。10月1日京都にて東上の汽車中に、7、80人ものコレラ患者が出たことが記録に残るが、おそらくこの中に安達文左衛門も含まれていたと思われる（註8）。そして、数日後には亡くなるのである。その無念たるや戦地で斃れた兵の無念にも勝るともけっして劣るものではなかろう。むしろ終戦を迎え、安堵と喜びを体験しただけに、船中か列車中にて猛烈な下痢に襲われた時の茫然自失感は想像に難くない。

安達文左衛門が運ばれ亡くなった「京都府陸軍避病院」は、大阪陸軍病院分院として臨時に設けられた「西京虎烈刺病室」のことであろう。大阪陸軍臨時病院は西南戦争の傷病兵を受け入れるための臨時病院で、戦地九州から続々と傷病兵が送られ、その数8569人（うち死者495人）を数える。大阪上本町の本部（現在の難波宮跡あたりにあった）の他、大阪に6病室、神戸虎烈刺病室、西京虎烈刺病室、滋賀縣虎烈刺病室の全10病室が設けられた。10病室のうち4病室（分院）がコレラ患者を受け入れる「避病院」である。西京（京都）と滋賀縣（大津）は、移動中に発症した兵士を隔離したのであろう。西京虎烈刺病室は「東福寺中ノ寺院ヲ假用ス」とあり、火急であることから東福寺内の既存寺院を借り受けての開設であった（註9）。ところで、後に満州鉄道総裁や大臣を歴任する後藤新平は、当時大阪陸軍臨時病院におり、西京虎烈刺病室に駆けつけている。「惨憺見ルニ忍ヒス」といった状況の中、看護人を叱咤激励し必死の医療に従事したことが伝わる（註10）。安達文左衛門の治療には、若き日の後藤新平があたっていたのである。

コレラによる死者は、ただちに火葬されており、安達文左衛門も京都にて速やかに荼毘に付せられたと思う。そして、遺骨は大阪真田山陸軍墓地に運ばれて埋葬された可能性が高い。大阪真田山陸軍墓地には神戸や西京（京都）で亡くなった兵士の墓も多くあり、そのほとんどが10月前半のコロナ感染拡大期の日付である。中には「虎列刺」とハッキリと刻まれた墓石（写真1）も多くあり、とても驚かされる。墓碑銘の一覧が報告されている（註11）が、調査時点で破損や崩壊の墓碑も多く、安達文左衛門の墓は残念ながら特定はできなかった。ただ、B—39—2の識別番号が付された墓石は破損箇所が多いながらも、正面「陸軍：卒安：文佐□：」右側面「（破損）」左側面「明治十年：月十□罹：列□病同月十一：」（：や□は判読不明）とされている。これは、他の名古屋鎮台兵墓碑の例から、正面に「陸軍兵卒 安達文佐衛門墓」右側面「名古屋鎮台歩兵第六連隊第●大隊第●中隊」左側面「明治十年十月十日罹虎列刺病同月十一日死」背面「愛知県尾張国味岡村平民」との復元も可能であろう。「左」が「佐」「十日死」が「十一日死」と、「東春日井郡誌」とは異なる点もあるが、B—39—2の墓石を「安達文左衛門 墓」である可能性が高いと考えておきたい。

さて、今回のコロナ禍にあって、喜劇人志村けんさんが亡くなったことは衝撃であった。そして、ご家族が最後のお別れもできぬまま火葬され、遺骨のカタチとなってようやく再会できたことは、感染症による死の悲惨さを全国民にまざまざと見せつける結果となった。明治の安達文左衛門も火葬から埋納まで家族の立ち会える隙間は全く無かったであろうし、さらに遺骨が故郷に戻ることも無かったと思われる。しかしご遺

写真1　真田山陸軍墓地碑
（BIN★さん撮影）

写真２　真福寺の安達文左衛門墓碑

族の気持ちが墓碑の建立で示されることもあろうとの思いで、故郷の味岡村内でもお墓を探してみることとした。まずは手始めに久保一色の真福寺墓地に飛び込んだのだが、いきなりのビンゴ！であった。墓地入り口近くの戦没者墓碑群のなかに「安達文左衛門」の名を見つけたのである。たまたまの偶然ではあるが、やはり、なにかしらのお導きを感ぜずにはいられない。思わず合掌。墓碑は硬質砂岩製で、台石３段の上に高さ63㎝巾25㎝の角柱型である。正面に戒名「忠道盡義禅定門」、側面に「明治十丑九月五日」の日付と「安達文左衛門夏」と刻まれる（写真２）。日付は旧暦で新暦に換算すれば『東春日井郡誌』に記載の10月10日に一致する。太陰太陽暦（旧暦）から太陽暦（新暦／グレゴリオ暦）への変更は、明治５年から６年にかけて施行されているが、庶民にあってはまだまだ旧暦が使われていた。

早速、真福寺ご住職の笠井正見師に過去帳の調査をお願いしたところ、快くお引き受けいただき、「中屋敷　文右エ門　忰　文左エ門事廿三才　徴兵ニ出　西京而死ス」と記されていることをご教示いただいた。文左衛門は23歳の若さでの死去であった。さらに、その家系の今は？との問いには「明治廿八年九月　文右エ門逝去ニテ家門ハ絶家ス」と過去帳にあることをお教えいただき、とても驚いた。明治６年に始まった徴兵制は、「一家の主人たる者」やそれを継ぐ「長子」は兵役義務免除であり、自ずと次男以下が多かった。ところが、父、文右衛門が亡くなり、家が絶えてしまったということは、文左衛門は「長子」だったのであろうか。また、当時の徴兵検査はかなり厳しく、「甲乙丙丁戊」の五段階評価のうちの甲種のみが合格で、合格率は10人に１人か２人と、かなりの狭き門でもあった。こうして浮かんだ安達文左衛門の人物像は、長子ながら志願し、軍人としての道を選んだ頑強な若人であり、だからこそ七カ月に渡った熾烈な戦争をも生き抜くことができたのではなかろうか。そんな屈強な兵士も感染症コレラには勝てなかったのである。東春日井郡誌の「凱旋途中」の４文字は、その死の悲しみを一段と深めている

河田忠右衛門の場合

「明治10年10月５日　鹿児島障子病院に於て死亡　篠岡村　陸軍兵卒」（『東春日井郡誌』）

河田忠右衛門も、愛知県護国神社内の『戦死者之碑』にみることができるので、名古屋鎮台歩兵第６連隊の所属である。九州での戦歴は確認できないが、西郷軍との最後の決戦地である鹿児島での死去であることから、長い戦いをきり抜けてきた兵士である。

亡くなった「鹿児島障子病院」の情報も少ないが、「博愛社」の大波治卿医員は「十月一日から四日まで、障子川木支病院でコレラ患者の治療にあたった」との活動報告をしており（註12）、鹿児島障子病院とは障子川木支病院（現・鹿児島市内にあった）のことと思われる。そして、その時の大波治卿医員談話として「医師といへども当時の虎列刺と聞けばビクビクもので、現に病毒に感染した医者も三、四人あるといふ次第ですから、皆な皆な大いに恐れ便所へ行った時下痢しなければ先づ先づよしと喜ぶ位でした」と述べ、感染症禍での緊迫した医療状況をうかがうことができる。いずれの時代も、医療従事者の危険と背中合わせ的な活動には本当に頭が下がる。河田忠右衛門の入った障子川木支病院は、まさに虎列刺患者にあふれていたのであり、河田忠右衛門もまた、感染症に冒されていた兵士のひとりと考える。そして大波治卿医員の治療看護もむなしく、大波が障子川木を離れた10月５日その日に河田忠右衛門も亡くなっている。

河田忠右衛門の墓所は「祇園之洲官修墓地」（鹿児島市清水町）にあった（註13）。「川田忠右衛門」と三本川の「川田」とはなっているが間違いなかろう。ただし、「あった」と過去形にしたのは、整然と並んでい

た個人の墓石は既にない。西郷どんのお膝元であるから、官軍の墓地が早くから荒廃が進んだのも、さもありなんである。現在は整理された公園に、大きな「官軍戦没者慰霊塔」1基が建つのみである（写真3）。

また、故郷の篠岡村内でも墓碑調査を実施した、旧村内の墓地を見て廻ったが残念ながら「河田忠右衛門」の名は見つけることができなかった。ただ、「河田」姓は野口の龍洞院墓地に多くあり、当時の野口村出身者であった可能性を強く感じた。

おわりに

明治期のコレラは、その後何年にもわたって流行が繰り返えされた。特に明治12年と19年には死者が年間10万人を超える爆発的な感染であった。結局、明治29年までの20年間で36万人以上の命がコレラで失われている（註14）。今回取り上げた西南戦争の時点はまさに「コレラとの闘い」の始まりだったのである。神戸港での凱旋兵の強行突破とその後の感染蔓延は、流行初期の象徴的な出来事であった。熾烈な戦いを乗り越えて生き抜いた兵士にしてみれば、「戦争に比べれば疫病なぞたいしたことではない！」との思いに駆られたこともよく理解できる。また、戦いに傷つき療養中の兵士が罹患することは、「傷口に塩」どころか「傷口にコレラ菌を塗る」ようなむごい仕打ちであり、戦争と感染症の二つの国難を同時に抱え込んだ、まさに踏んだり蹴ったりといえよう。

写真3　祇園之州公園の慰霊塔
（中原幹彦氏撮影）

ところが、である。表2は、鎌田祐一さん作成の「国難死者数」で、おおよそ明治から現代までの国難とされる「戦争」「自然災害」そして「感染症」を集計したものである。このコロナ禍にあって、予期せぬ自宅時間を活用して集計されたそうである。横軸の8目盛分（80年分）を個人が生きる幅と仮定すれば、どこの8目盛幅を切り取っても、人生のうち何度かは「国難」に遭遇し、しかも同時や複数経験することも当然と思えてくる。戦争は今後一切御免被るとしても、「災害と感染症」はこの先も必ずやってくるである。

結局は、この繰り返しがあることを前提にして「心構え」、「備える」ことが大切なのであり、そのためには過去を学び、「忘れない」ことと「未来に伝える」ことが肝要であるとつくづく思う。これからも、地域に関わりのある「戦争」「災害」「感染症」にスポットを当てて、伝える活動をしていきたい。

小稿の作成にあたり左記の方々にお世話になりました。記して謝意を表します。ありがとうございました。
（敬称略）
伊藤厚史、笠井正見、鎌田祐一、中原幹彦

【註】

（1）1990年『靖國神社忠魂史　西南の役』復刻版　青潮社

（2）伊藤厚史2012年「愛知県人の西南戦争」『戦史考古学研究　No.7』

（3）石黒忠悳編纂1878年『大阪陸軍臨時病院報告摘要』陸軍文庫

（4）月澤美代子2012年「明治初期日本における医療情報の伝達」『日本医史学雑誌』58－4

（5）山下喜明1968年「日本検疫史」『日本醫史學雑誌』第14巻第1号
表1の「日高忠次　伍長」は、この時上陸した一人と思われる。直後の10月1日神戸で死亡。

（6）註5に同じ

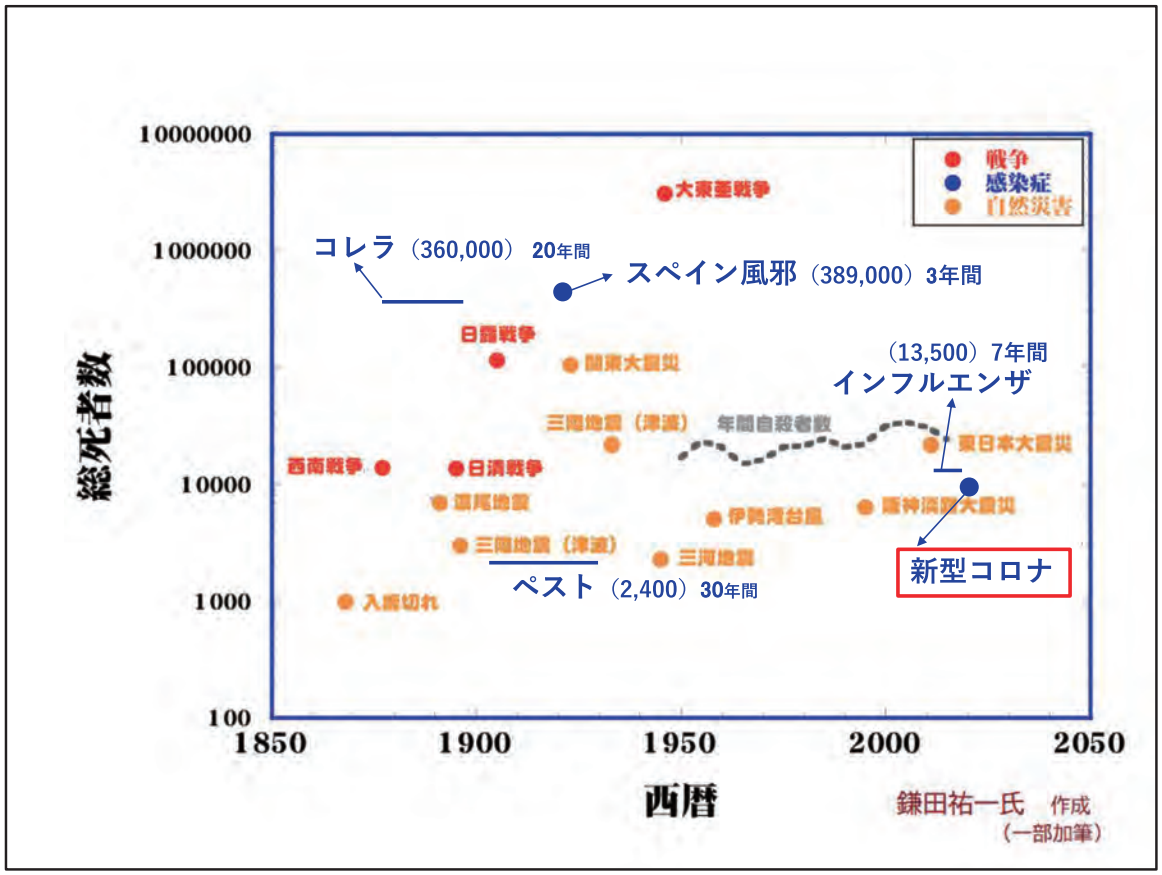
（7）1924年「虎列刺予防史」大阪府衛生課

（8）註5に同じ
なお、表1の「名前不詳　軍曹」も、安達文左衛門と同じ凱旋帰還中に京都での死亡である。

（9）註3に同じ。なお、京都には宇多野村にも避病院が建設されている（京都府立医科大学年表より）が、兵士であることから、東福寺の大阪陸軍臨時病院分院であろう。

（10）笠原英彦1996年「近代日本における衛生行政論の展開－長与専斎と後藤新平－」『法學研究』69－1。及び、石黒忠悳編纂1878年『大阪陸軍臨時病院報告摘要』陸軍文庫。
後藤新平は南満州鉄道（満鉄）の初代総裁。逓信大臣、内務大臣、外務大臣を歴任。政治家として有名であるが、優秀な医師でもあり、西南戦争時は20歳。大阪陸軍臨時病院の雇医として名前が載る。そして24歳にして愛知県医学校（現・名古屋大学医学部）で学校長兼

表2　明治以降の国難死者数



病院長となっている。

（11）２００３年「旧真田山陸軍墓地概要図・墓碑銘文一覧」『国立歴史民俗博物館研究報告第１０２集』

（12）喜多義人２０１８年「西南戦争の傷病者救護と博愛社」日本法学第84－２巻第二号なお、「博愛社」は日本で最初の民間戦時救護団体で、日本赤十字社の前身。西南戦争が最初の活動であり、敵味方の区別なく負傷者の救護を行うことで、日本は人道を重んじる文明国であることを欧米諸国へ認知させたい狙いがあったともいわれる。西南戦争での救護活動は明治10年５月27日から10月31日まで、救護した患者１４２９人と記録されている（日本赤十字社熊本支部HPより）。

（13）中原幹彦氏のご教示による。

（14）註５に同じ

【参考・引用文献】

伊藤厚史２０１２年「愛知県人の西南戦争」『戦史考古学研究　№７』

２０１７年『愛知県史　通史編６　近代１』愛知県

林志津江２０１５年「翻訳　北里柴三郎 日本におけるコレラ」北里大学一般教育紀要20

総務課田中１９９９年「西南戦争とコレラ－県庁文書から－」『愛知県公文書館だより』第三号

山下喜明１９６８年「日本検疫史」『日本醫史學雑誌』第14巻第１号５月

喜多義人２０１８年「西南戦争の傷病者救護と博愛社」日本法学第八十四巻第二号

２０１３年「三輪民弥　明治十年　鹿児島戦争日記」大垣市教育委員会

新井勝紘・一ノ瀬俊也編２００３年「慰霊と墓」『国立歴史民俗博物館研究報告第１０２集』国立歴史民俗博物館

ブログ『ＢＩＮ★の「この記なんの記」』http://nostalghia.asablo.jp/blog/

移設された犬山駅

NPO法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
古川　博昭

はじめに

犬山に鉄道が敷設されて110年近くになるが、駅と線路は最初期の状況から少しずつ変化してきた。犬山市内では、小牧線や広見線の駅が廃止されたり、広見線がかつては犬山口駅から分岐していたのが犬山駅での分岐に付け替えられたりしている。そして犬山駅も百メートルほど移動した。その犬山駅の移設について述べようと思う。

図1 開業当初の犬山駅　大正時代初期

開業時の犬山駅

犬山駅は犬山線開通の1912年（大正元年）8月6日にでき、その14年後の1926年（大正15年）に移動した。新駅誕生時の駅画像（図1・註1）犬山線開通の官報（図2・註2）を紹介する。

○通運

○郵便報知運搬開始並停車場名稱、哩程變更　去月三日名古屋電氣鐵道株式會社一宮線中枇杷島橋西印田間、犬山線岩倉犬山間運輸開始ヲ許可セシニ同六日ヨリ運輸開始ノ官屆出アリ共停名、哩程左ノ如シ又從來開業中ノ押切町枇杷島橋間ハ右開業ト同時ニ名稱及哩程ヲ左ノ通變更セリ（鐵道院）

一宮線

押切	八數町間	〇五五
八數町	東枇杷島枇杷島橋間	〇五五
東枇杷島枇杷島橋	枇杷島橋下小田井間	〇五五
枇杷島橋下小田井	中小田井平田橋間	一一一
中小田井平田橋	西春駅西春間	〇六六
平田橋	西春駅西春間	〇六六
西春駅	西春駅西春間	一五五

稲葉	岩倉間	〇五五
岩倉	小山間	一五五
小山	羽根間	〇七七
羽根	淺野間	〇七七
淺野	印田間	〇六六
印田	西印田間	〇六六
西印田	犬山駅	一五五

小折	布袋間	〇六六
布袋	古知野間	一三三
古知野	宮後間	〇八八
宮後	柏森間	〇五五
柏森	高雄間	一五五
高雄	木津用水間	〇五五
木津用水	犬山口間	〇五五
犬山口	犬山間	〇五五

図2 官報1912年09月11日

官報では犬山口・犬山間の距離が0・5マイルとなっているが、「1917年（大正6年）鉄道院発行　鉄道停車場一覧　大正6年3月31日現在」など、他の資料では0・6マイル（0・9キロ）となっていてそちらの方が正しいようである。

駅移設の経緯

駅が移設されたのは、鵜沼方向に犬山線を延長するにあたって、当時終点だった犬山駅から延長しなかったためである。そのまま延長することには問題があったのであろう。そのあたりの経緯を見ていく。

まず、鉄道がない明治期の地図（図3）を見よう。

犬山線は住宅地を避けるようにし

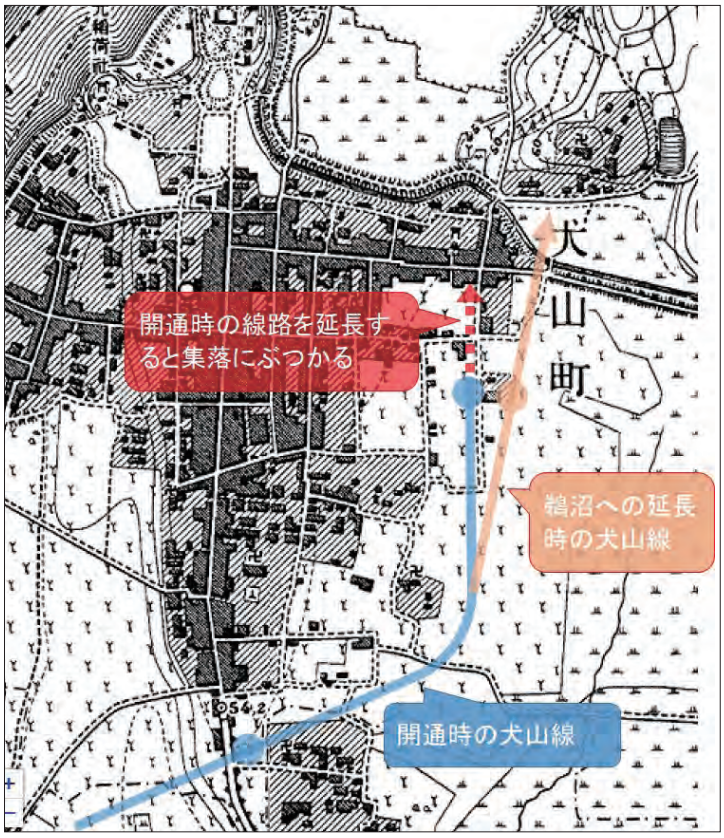


図3 1893年発行の地形図
（明治24年測図　犬山　20000分の1）に加筆

て、桑畑を通って犬山の町並みの東端に最初の犬山駅を作った。犬山線は現在の名鉄の前身の名古屋電気鉄道が郊外線として建設した。郊外線という名は、名古屋市内の路線、すなわち路面電車をすでに経営していて、新たに名古屋市外に路線を展開したためであった。路面電車の経営は順調だったようであるが、犬山線開通の数年後から名古屋電気鉄道は名古屋市内の路面電車を名古屋市へ譲渡することに向かわざるを得なくなる。それはドル箱を手放すことなのだが、その理由は電車賃が高いという一般大衆の要求であった。結局1921年（大正10年）に路面電車以外の郊外線を名古屋鉄道として分離して発足させ、路面電車を名古屋市に譲渡した。その前後から「会社規模の縮小の穴を充填するための路線の延長・拡大」をさせるため犬山・美濃太田間と犬山・関間に免許を取得したという。以上名古屋鉄道百年史　119ページなどによる。

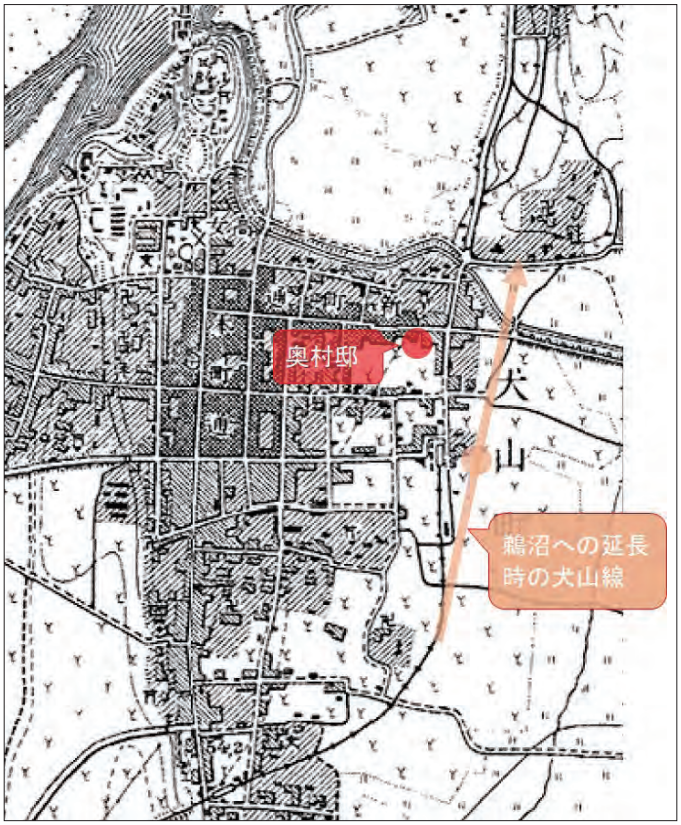


図4 1923年発行の地形図
（大正9年測図　犬山　25000分の1）に加筆

犬山・関間の路線を計画したときに、犬山駅からまっすぐ延長すると、奥村邸が存在する余坂の東西の通りの家並みにぶつかってしまう。明治期の地形図でも家並みが描かれているが、次に示す大正9年測図の地形図においても同じ状況が見て取れる。犬山駅の手前から犬山線を少し東向きに北上させる新線を作ったのはその家並みを避けるためだと私は思う。そのあたりの事情を明記した資料を見つけてはいない。移設する前の駅が載っている大正9年測図の地形図（図4）をご覧願う。

大正14年の犬山駅付近(『大聖寺30年史』より)

図5 「犬山の歴史散歩」164ページ

そして、犬山線の延長工事の最中の、旧犬山駅も写っている写真（図5）を見つけたので、それも載せる。

なお、画像にある「大聖寺30年史」とは、1984年3月28日に成田山名古屋別院大聖寺が発行したものであるが、その書籍には該当の写真は掲載されていない。

この写真に説明をつける（図6）。

図6を解説すると、旧犬山駅のホームと駅舎、貨物駅舎は開業当初の犬山駅の写真と見比べて判断した。特に屋根の向きと重なりに注意した。大正9年の地図に新町通と書いてあるのが余坂の東西の通りであるが、写真では通りに沿って家屋が白っぽく密集している。建設中の新犬山線と絡むように交差する農地の中の小道は後で示す昭和7年修正の地形図で確認できる。この小道は戦後の地図には消滅しているが、この写真が新犬山線を写していることを証拠立てている。

このようにして犬山線が延長されて、いっしょに犬山駅も移設された。犬山駅の移設は犬山橋駅（現在の犬山遊園駅）まで延長開業した1926年（大正15年）5月2日になされた。

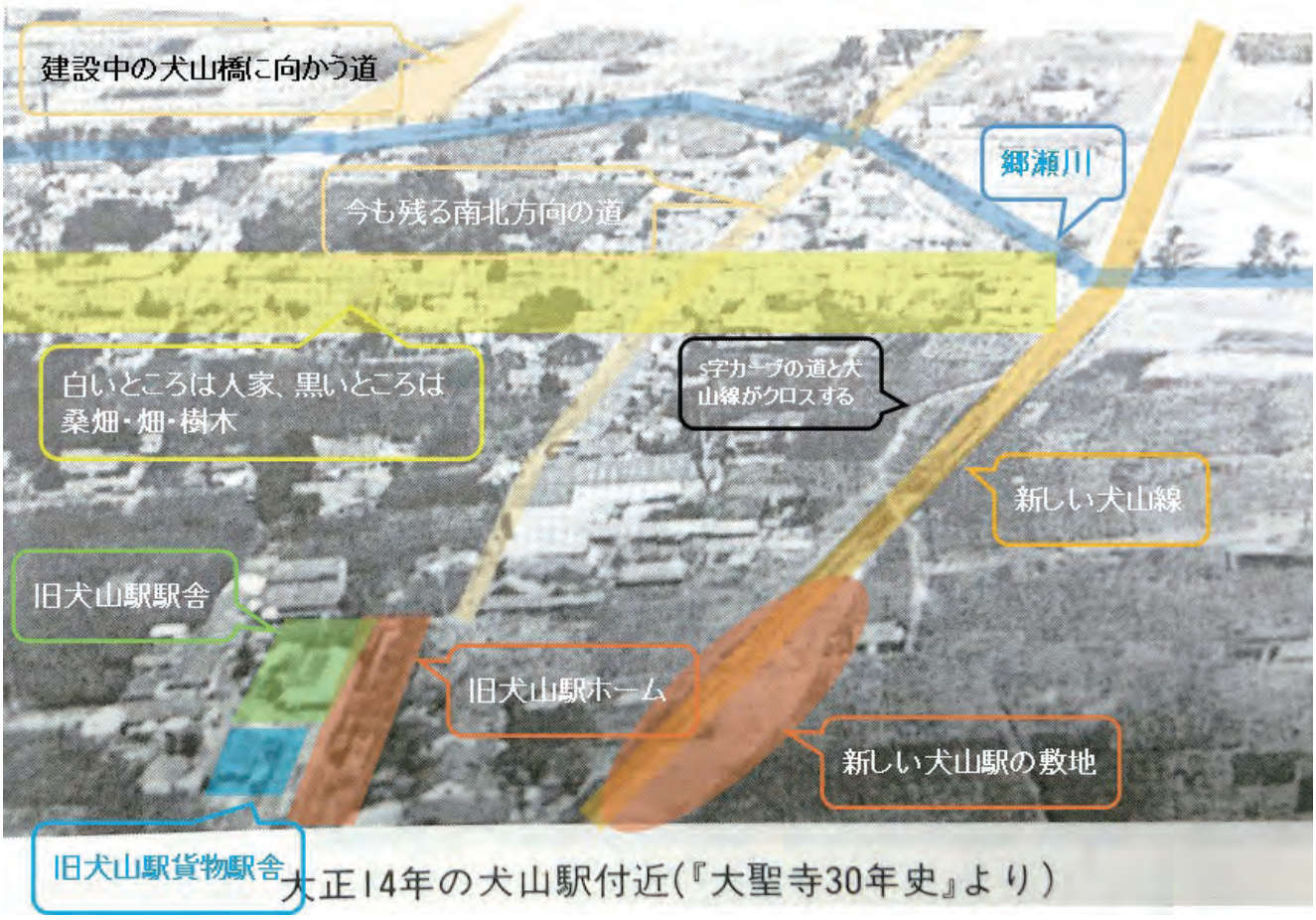


図６　【図5】に説明を加筆

犬山市史の記述

ところが、犬山市史通史編下252ページに翌年4月に犬山駅が移転したという記述がある。いっぽう、名古屋鉄道社史と名古屋鉄道百年史を調べたがそのような記述はなく、ただ、1927年（昭和2年）4月1日にダイヤ改正があった（名古屋鉄道百年史946ページ）と記されていた。

犬山市史が正しいとすると、犬山橋駅（さらに同年10月1日には新鵜沼駅）まで開通したが、犬山新駅はいまだ建設途中であった。そのため、犬山新駅が整備されるまで新線を犬山口駅からの枝線のような扱いとした。新線区間だけを往復する電車を走らせた。等々想像できる。しかしこれだと現場は面倒くさいことを我慢していたとしか思えない。

公的な文書として犬山橋まで開通したときの官報（図7・註3）がある。

これを見ると、既設駅犬山と犬山橋駅間で運輸営業を1926年5月2日開始したと書いてある。「既設駅」というのは明らかにおかしいが、犬山・犬山橋間は0．7マイルと明記されている。犬山・犬山橋間は0．7マイル分の運賃を収受するのであって、犬山・犬山口・犬山橋とVの字で行く1．9マイルの運賃は収受しないだろう。

犬山市史が正しいなら、その証拠がどこかにあるのだろうか。証拠がでるまで、犬山橋まで延長開業したときに犬山駅は移設されたと私は思っている。

現在の状況との対比

1年ほどのうやむやがあるが、犬山駅の移設はこのようになされ、移設後の駅が表示された昭和7年修正の地形図（図8）を示す。

この地形図を見ると駅の南で線路がなめらかなカーブでなく、ぐにゃりと曲がっている。地図表現の誤りであ

◉地方鐵道運輸開始　名古屋鐵道株式會社所屬鐵道犬山、犬山橋間本月二日ヨリ旅客運輸營業開始ノ旨届出アリタリ其哩程左ノ如シ（鐵道省）

驛名	所在地	哩程
犬山（既設驛）	愛知縣丹羽郡犬山町大字犬山	
犬山橋	犬山、犬山橋間	〇・七哩分

図７官報1926年05月07日

ろうか。旧線路の途中から伝聞情報のみで新線路を引いたのかと思う。こんな路線はあり得ない。その位置は今の市役所の北東端すぐのところであり、今も犬山駅の構内の一部、ポイントが破壊されて線路がつながっていないが、矢作建設の作業鉄道車両が置かれているところである。

それでは現在の地図に移設前の犬山線と犬山駅を表示してみよう（図9）。

次に現在の旧駅の状況を写真で示す（写真1）。

右側の茶色い2階建の建物に線路の末端とホームがあり、左の駐車場に駅舎があった。

広見線の起点駅のこと

犬山駅が移設する1年前に広見線が開通している。広見線は先に述べた犬山・美濃太田間に取得した免許によって名古屋鉄道が計画し、建設した路線である。その広見線は犬山口駅を起点として開通した。犬山口駅起点にしたのは、「用地や建設費その他の事情で最初の計画通り」（名古屋鉄道社史110ページ）と会社側は説明している。私は犬山口駅を起点にした理由の一端に犬山駅の移設があったと思っている。

広見線の今渡・犬山口間が完成したのが1925年（大正14年）4月24日である。建設は2年前に着手している。そのとき犬山駅はどうであったか。1925年は犬山線の線路を付け替えての延長工事の最中だった。つまり広見線をそのとき稼働していた犬山駅を起点にすると、1年後には線路を付け替えなくてはならなくなった。いっぽう新しい犬山駅を起点にするにはもう1年待たないといけない。この葛藤があったのだ（図10）。

広見線も名古屋鉄道の所属路線として建設されたから、犬山線の付け替え計画は知っていたはずである。だから当初の計画から犬山口起点として、犬山線の付け替えの影響をなくしたかった。旧駅に接続して、1年後に新駅に接続しなおすということをしなかった。これが犬山口駅を起点とした言い分の「その他の事情」に含まれることだと思う。

もちろん葛藤などなかったということも考えられる。広見線は犬山口

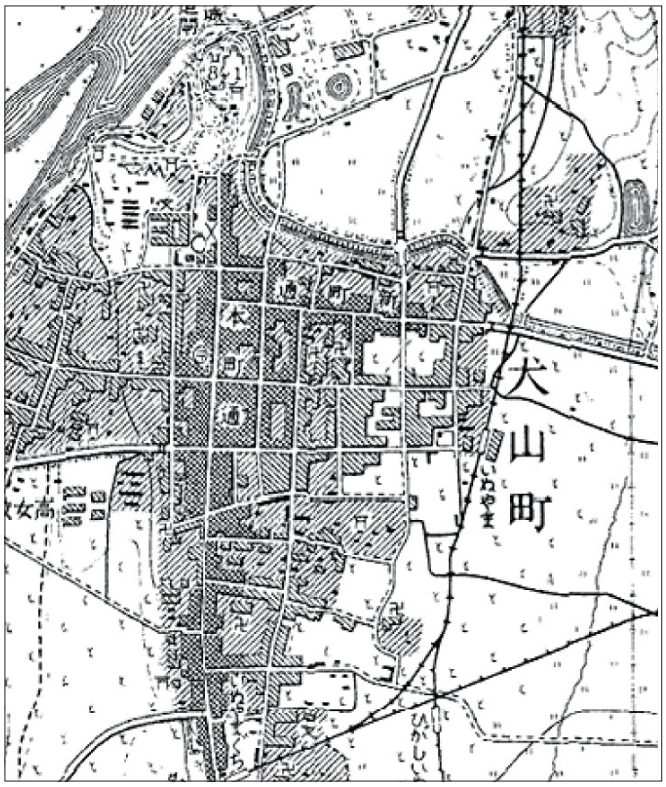


図8 1935年発行の地形図
（昭和7年修正 犬山 25000分の1）

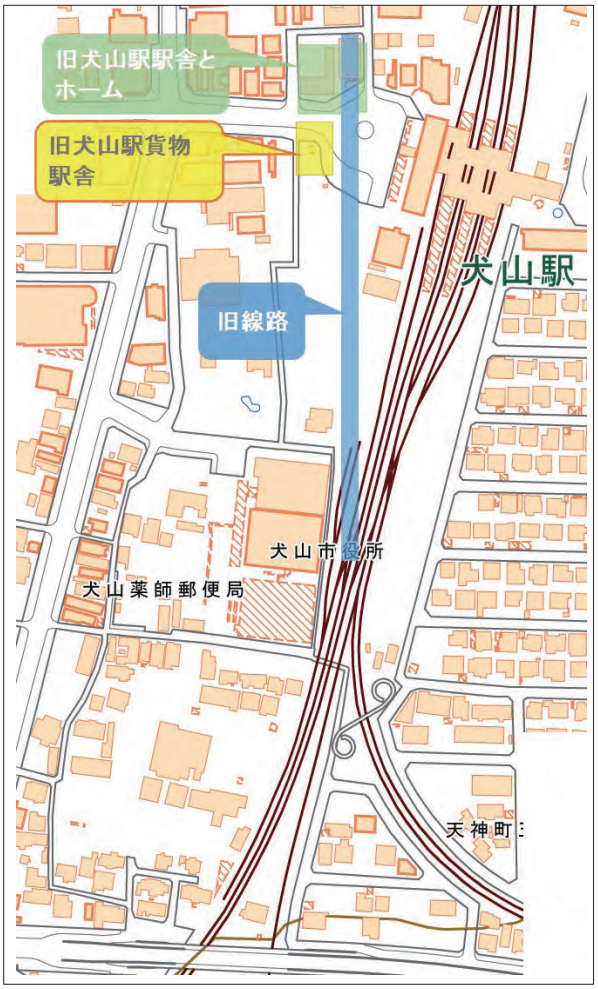


図9 国土地理院ウェブサイトに加筆

写真１ かつて犬山駅があった場所

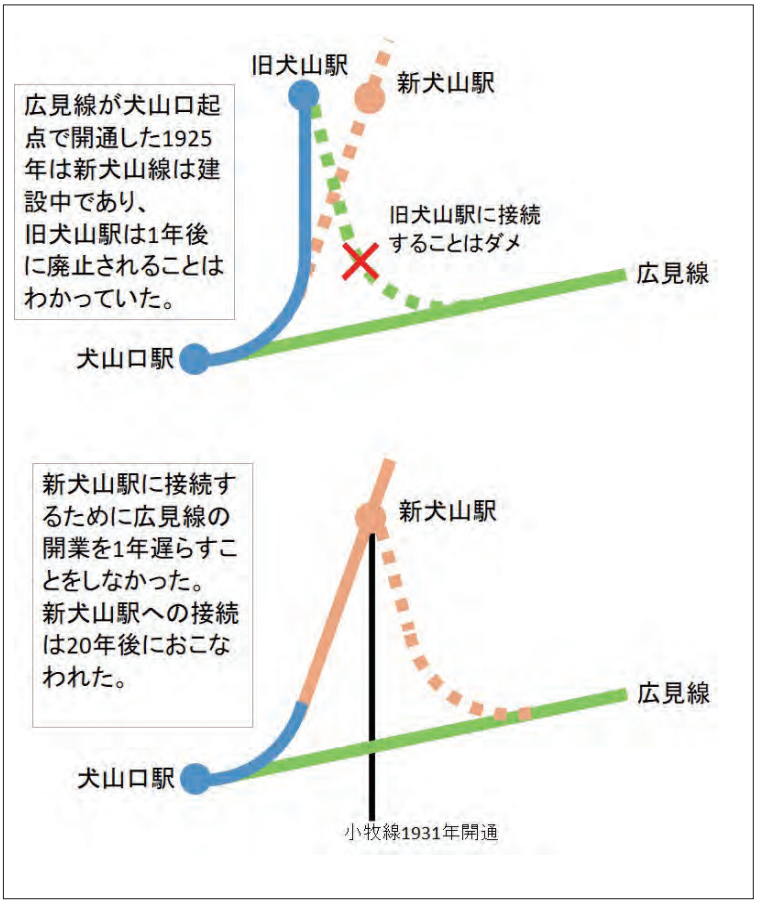


図10 広見線起点駅の葛藤

起点と計画され、犬山駅移設と一切関係なかったと。

広見線の起点について、当時の犬山町は「町の盛衰にかかわるから犬山駅にしてほしい」（名古屋鉄道社史１１０ページ）と要望していたがかなわなかった。しかしその後、犬山線が新鵜沼に延伸され各務原鉄道とも合併し、また小牧線も合併して犬山駅の優位が一段と高まった。結局、名鉄は戦後まもなくの１９４６年（昭和21年）３月１日に広見線を犬山駅起点に付け替えたのであった。

終わりに

犬山駅は３本の線が集まる大きな駅である。もともとは犬山線の終点駅でしかなかったが、あとから小牧線（当時の名称は大曽根線）、広見線が分岐するようになった。建設当初の位置を変えたりするのは、当初には予想していなかったことが発生したためである。鉄道はシステマチックなものと思われるだろうが、偶然や状況に巻き込まれるもので、そうやって消えていった鉄道の跡を見ていくのは楽しいものですよ。

【註】

註１　名鉄資料館　特別展示室　犬山線開通１００周年記念展（平成24年 秋季特別展）https://www.meitetsu.co.jp/recommend/library/exhibition/detail/1235004_5073.html

註２　国会図書館のデジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2952131/8

註３　国会図書館のデジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2956260/8

【参考文献】

犬山市史資料編６　１９８９／３／10　犬山市発行

名古屋鉄道社史　１９６１／５／16　名古屋鉄道発行

名古屋鉄道百年史　１９９４／６／13　名古屋鉄道発行

ふるさとの想い出写真集　明治・大正・昭和犬山　１９８３／11／30　国書刊行会発行

犬山の歴史散歩　１９８５／６／20　山崎三郎著　創文出版社発行

上野古墳群出土の須恵器について

NPO法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
望月 友恵

はじめに

平成31年4月に文化財保護法が改正された。その改正の趣旨には「過疎化・少子高齢化などを背景に、文化財の滅失や散逸等の防止が緊急の課題であり、未指定を含めた文化財をまちづくりに活かしつつ、地域社会総がかりで、その継承に取組んでいくことが必要。このため、地域における文化財の計画的な保存・活用の促進や、地方文化財保護行政の推進力の強化を図る」と述べられている（註1）。文化財を現在のまちづくりに活かしていくことで、結果文化財が後世へと継承されていく。そして、そのためには地域の理解と参加が必要不可欠であるというのは至極当然のことである。

NPO法人ニワ里ねっとでも「文化遺産の見えるまちづくり」を旗印に掲げ、文化遺産と地域をどのように繋ぐかを模索しながら活動してきた。そうした活動の中で将来の文化遺産継承の担い手となる子ども達は、非常に重要な存在であるといえるが、どこの学校区にも地域特有の文化遺産は存在するにも関わらず、教育活動の場面に十分に活かされていないのが現状である。

そこで、ニワ里ねっとでは犬山市立栗栖小学校など犬山市内の小学校において地域の文化遺産を活かした教育活動を行なってきた（註2）。犬山市立池野小学校では、平成31年度に所蔵資料の整理と展示づくりをし（註3）、令和3年度からはそれらの所蔵資料を活用した授業を行う予定である。本稿では犬山市立西小学校保管の上野古墳群出土の須恵器について資料の整理報告をし、この報告を第一歩として学校保管の資料を子ども達への教育活動につなげていきたい。なお、本稿では出土須恵器のみを対象としたが、そのほかに耳環や鉄刀などの金属製品も学校に保管されている。また犬山中学校には上野第1号墳出土の石棺や弥生土器、磨製石斧が保管されている。

上野古墳群について

犬山市立犬山西小学校保管の考古資料は、上野遺跡および上野古墳群から出土した資料である。愛知県犬山市に所在する上野遺跡・上野古墳群は、木曽川によって形成された標高40mほどの河岸段丘上に位置しており、段丘直下には現在木津用水が流れている（図1）。昭和60年代までは桑畑が一面に広がる中に古墳の墳丘が残っていたが、宅地開発により墳丘はほぼ滅失、現在は閑静な住宅街となりその痕跡はほとんど留めていない。部分的に発掘調査が行われており、縄文・弥生・古墳時代にまたがる複合遺跡であることが分かっている。

上野古墳群は段丘面に流れ込む小河川によって形成された微高地に30基以上の小規模な古墳が点在していた（註4）。昭和33年に上野第1号墳、昭和41年に上野第2・4号墳、昭和47年に上野第5号墳、昭和52年に上野第6号墳、岩神古墳、坂下第1号墳、昭和55年に上野第8号墳が調査されている。上野第1号墳からは、石室内部から刳抜式の家形石棺が良好な状態で出土しており、現在は犬山中学校で保管がされている。調査されず滅失してしまった古墳も多く全体像は明らかとはなっていないが、6世紀末から7世紀にかけての古墳時代終末期に属する古墳群であることが分かっている。また、古墳の多くが川原石積みの横穴式石室を用いており、可児市の河合古墳群や一宮市の浅井古墳群

図1 上野古墳群の位置図（国土地理院電子国土webに加筆）

などと同じく木曽川中流域の終末期の古墳群の特徴を呈している。

上野古墳群出土の須恵器

上述の通り、上野古墳群ではいくつかの古墳が調査され犬山市教育委員会発行の報告書や犬山市史などにその調査成果が報告されており（註5）、現在、出土遺物の一部が犬山西小学校に、一部が青塚古墳ガイダンス施設に保管・展示されている。どちらも犬山市所蔵の資料であることは変わりないのだが、注記のない資料も多く、どの古墳から出土した資料がどこに保管されているのか分からなくなりつつある状況であったため、両保管の資料を合わせて資料整理を行うこととした。

写真１ 犬山西小学校の展示ケース

すべての資料に明確な注記がされていないため、報告書の実測図図版及び写真図版と比較して、可能な限り資料の同定をした。また、報告書等に掲載されているが犬山西小学校および青塚古墳ガイダンス施設に保管が確認できない出土資料も複数点あった。

犬山西小学校保管の上野古墳群出土の須恵器は全35点で、子ども達が行き来する廊下に置かれた展示ケースに保管されており、学校の教育活動に活用するために出土品の一部が小学校に展示されたものと想定される（写真1）。展示には「上野古墳から出土した土器（上野5号墳）」と解説が掲示されていたが、5号墳のほかに上野第2号墳、第3号墳の遺物も保管されていた。青塚古墳ガイダンス施設に保管されている上野古墳群出土の須恵器は全22点で上野第2号墳、第3号墳、第4号墳、第5号墳、第6号墳、坂下第1号墳の資料がある。表1に犬山西小学校保管資料、青塚古墳ガイダンス保管資料の一覧を示した。実測図はすでに報告書等に掲載されているためそちらを参照していただきたいが、第3号墳と第5号墳の杯類に関しては図面との照合が困難を極めたため再実測をして本稿に掲載をした（図2）。「上2」と注記されていた資料については上野第2号墳の出土品とも想定されるが、報告書には同様のものは確認できず、写真図版などから上野第3号墳の資料と考えられる。

再整理をした上で、出土須恵器について若干の考察を加えたい。上野第3号墳出土の杯類をみると杯H蓋の口径は11・0cm～12・6cm、杯H身の口径は9・7cm～10・7cmであり、杯蓋の天井部と口縁部の境の稜線は明瞭である。また長脚2段透かしの高杯も存在することなどから、上野第3号墳の時期はおおよそH－44号窯式期（註6）に位置付けることができる。また、上野第2号墳についても、杯部に列線文を施す高杯の存在などからおおよそ同様の時期が想定される。一方、上野第5号墳については杯H蓋の口径が10・0㎝～11・1㎝、杯H身の口径が8・25㎝～9・8㎝と口径が全体に縮小しており、返りをもつ杯Gの存在も認められることなどから、H－15～I－101号窯式期に位置付けることができる。また、上野第6号墳、坂下第1号墳についても、I－101号窯式～I－17号窯式期まで下るものとされる。こうした出土須恵器の様相から、上野第2号墳・上野第3号墳→上野第5号墳→上野第6号墳・坂下第1号墳といった変遷が想定できる。ここで、それぞれの古墳の石室構造をみると、上野第2号墳・上野第3号墳は河原石積みで単室構造であるのに対し、上野第5号墳・上野第6号墳・坂下第1号墳は河原石積みで前室と後室からなる複室構造であり、単室から複室へという石室構造の変化が認められよう（図3）。

おわりに

犬山西小学校はまさに上野遺跡・上野古墳群の中にあり、昭和56年の犬山西小学校の新設に際しても上野遺跡西岩神B地区の発掘調査が行われている。この状況を子ども達の学習に活かさない手はないわけで、資料の一部を学校で保管することとなったのであろう。発掘調査された資料が分かれて保管されていること

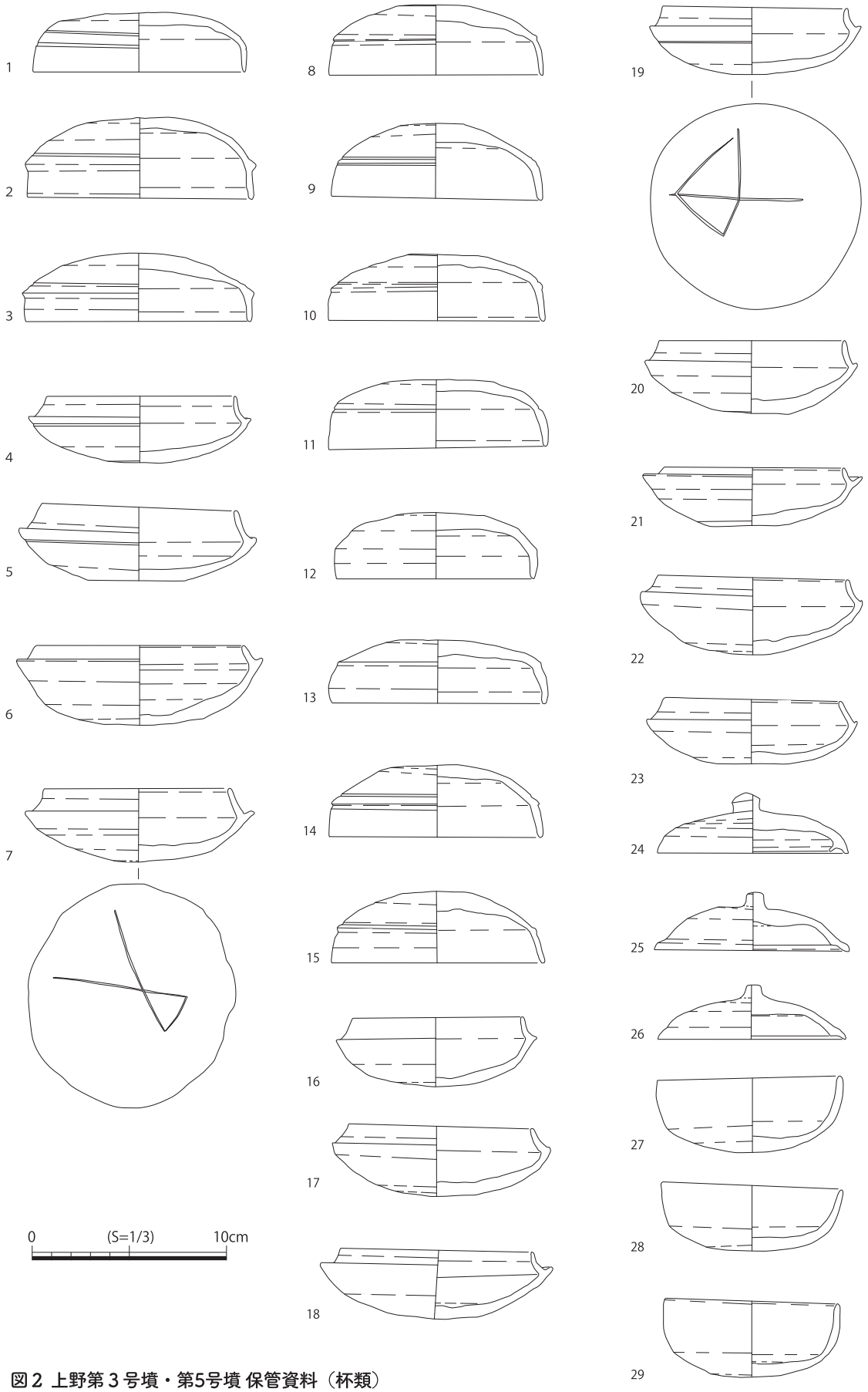


図２ 上野第３号墳・第5号墳 保管資料（杯類）

表１ 上野古墳群出土遺物一覧

保管場所	番号	図面番号	器種	注記	報告書	報告書実測図版	報告書図枝番	報告書写真図版	犬山市史掲載番号	出土古墳
犬山西小	1		無蓋高杯	K2	1	第６	13	第9	p294-93	２号墳
犬山西小	2		無蓋高杯	上2-8=K3	1	第８	32	第8		３号墳
犬山西小	3	1	杯H蓋	K3	1	第８か				３号墳
犬山西小	4	2	杯H蓋	上2-7	1	第８か				３号墳か？
犬山西小	5	3	杯H蓋	なし	1	第８か				３号墳か？
犬山西小	6	4	杯H身	上2-3	1	第８か				３号墳か？
犬山西小	7	5	杯H身	上2-4	1	第８か				３号墳か？
犬山西小	8	6	杯H身	上2-5	1	第８か				３号墳か？
犬山西小	9	7	杯H身	上2-2	1	第８か				３号墳
犬山西小	10	8	杯H蓋	K-5	2	第４か		第7	p309-114	５号墳
犬山西小	11	9	杯H蓋	なし	2	第４か		第7		５号墳
犬山西小	12	10	杯H蓋	K5-3(No7)	2	第４か		第7		５号墳
犬山西小	13	11	杯H蓋	K5	2	第４か		第7		５号墳
犬山西小	14	12	杯H蓋	K-5	2	第４か		第7		５号墳
犬山西小	15	13	杯H蓋	K5-4	2	第４か		第7	p308-113	５号墳
犬山西小	16	16	杯H身	なし	2	第４か		第8		５号墳
犬山西小	17	17	杯H身	K5(B、15)	2	第４か		第8		５号墳
犬山西小	18	18	杯H身	なし	2	第４か		第8		５号墳
犬山西小	19	19	杯H身	K5-9(No2)	2	第４	14	第8		５号墳
犬山西小	20	20	杯H身	(No6、11)	2	第４か		第8		５号墳
犬山西小	21	21	杯H身	K5-17	2	第４か		第8		５号墳
犬山西小	22	24	杯G蓋	K5-7	2	第４	19	第7		５号墳
犬山西小	23	25	杯G蓋	K5-5	2	第４か		第7		５号墳
犬山西小	24	27	杯G身	K5-13	2	第４か		第8		５号墳
犬山西小	25	28	杯G身	なし	2	第４か		第8		５号墳
犬山西小	26		無蓋高杯	K5,K5-18	2	第5	26	第10		５号墳
犬山西小	27		無蓋高杯	K5-17	2	第5	27	第10		５号墳
犬山西小	28		平瓶	K5	2	第5	35か	第９	p311-117	５号墳
犬山西小	29		平瓶	K5	2	第6	41	第6		５号墳
犬山西小	30		平瓶	K5-21	2	第5	36	第9		５号墳
犬山西小	31		台付長頸瓶	K5-22	2	第5	34	第10		５号墳
犬山西小	32		杯H蓋	なし						不明
犬山西小	33		杯H身							不明
犬山西小	34		杯H身							不明
犬山西小	35		杯H身							不明
青塚ガ	36		短頸壺	K-2 図46 上野2	1	第６	14	第9		2号墳
青塚ガ	37		高杯	K3	1	第9	6	第8		３号墳
青塚ガ	38		甕	図45 上野2 K-3	1	第9	1	第8	p295-95か（上野２号墳出土と誤って表記か）	３号墳
青塚ガ	39		短頸壺	K-3	1	第9	2か	第8	p295-96	３号墳
青塚ガ	40		台付長頸瓶	K3 図56 上野5	1	第9	5	第8		３号墳
青塚ガ	41		平瓶	上野4号図51	4				p108、図4-36-3	４号墳
青塚ガ	42	14	杯H蓋	上野5	2	第４か		第7		５号墳
青塚ガ	43	15	杯H蓋	K5(3)	2	第４か		第7		５号墳
青塚ガ	44	22	杯H身	上野５	2	第４か		第8		５号墳か
青塚ガ	45	23	杯H身	K5-6(13)	2	第４か		第8		５号墳
青塚ガ	46	26	杯G蓋	K5-6	2	第４か		第7		5号墳
青塚ガ	47	29	杯G身	K5-14	2	第４か		第8		５号墳
青塚ガ	48		高杯	図58 上野5	3					注記には５号墳とあるが対応する図面・写真がない
青塚ガ	49		大皿	K5	2	第5	33	第９		５号墳
青塚ガ	50		平瓶	図55 上野5 K5-19	2	第5	32か	第9		５号墳
青塚ガ	51		はそう	図57上野5 K5-20	2	第5	31	第8		５号墳
青塚ガ	52		平瓶	上野6号	3	第6	2	第１	p318-127	６号墳
青塚ガ	53		高杯	上野6	3	第6	1	第１	p318-128	６号墳
青塚ガ	54		土師器壺		3	第14	3	第12		坂下１号墳
青塚ガ	55		杯H身		3	第14	1	第12		坂下１号墳
青塚ガ	56		有台杯蓋		3	第14	4	第12		坂下１号墳
青塚ガ	57		提瓶		3	第14	2	第12		坂下１号墳

【保管場所】犬山西小：犬山市立犬山西小学校、青塚ガ：青塚古墳ガイダンス施設
【報告書】１：文献４、２：文献５、３：文献６

にはいささか問題もあるようにも思うが、子ども達の手の届くところに「本物」の資料が置かれていることは大変望ましいことであり、学校に保管されていることで地域特有の文化遺産を活かした学びの場を生み出すことが期待できる。しかし、当時担当されていた先生がおられなくなった今となっては、こうした資料が活かしきれていないのが現状である。考古資料を活かした活動はニワ里ねっとの得意とする範囲であり、今回の資料整理をきっかけに、今後は小学校の児童だけでなく広く市民にこうした学校所蔵の資料の価値を還元していくような活動を展開をしていきたい。

最後に、資料調査に際しては左記の機関にご協力を賜りました。記して謝意を表します。

犬山市立犬山西小学校
犬山市立犬山中学校
犬山市教育委員会歴史まちづくり課
（敬称略）

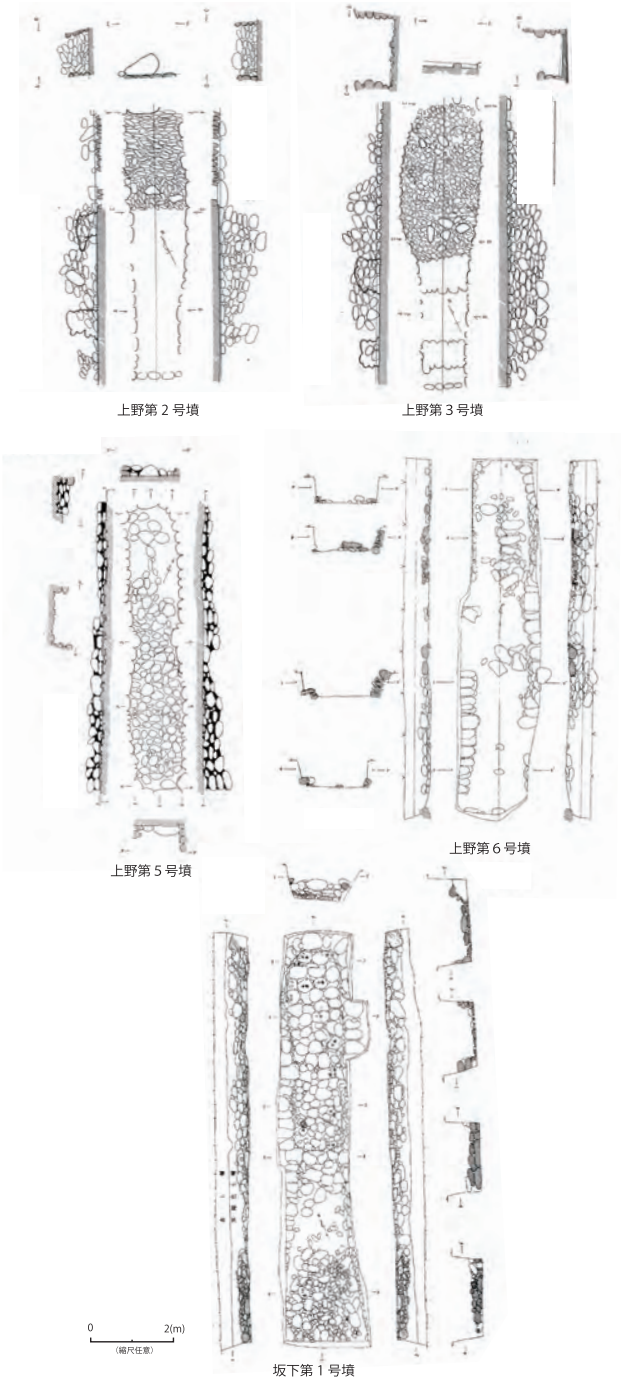


図３ 上野古墳群の石室構造
（各報告書（文献４・５・６）より引用）

【註】
註１：文化庁HPより「文化財保護法改正の概要について」
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunkazai/kikaku/h30/01/pdf/r1407909_03.pdf

註２：文献１に報告した。

註３：文献２に報告した。

註４：古墳の数は50～60基にも及ぶと想定されている。古墳の分布に関しては、文献３を参照されたい。

註５：上野古墳群に関する報告書等は文献４～６のとおり。

註６：須恵器の編年は文献８に依拠した。

【参考引用文献】
文献１：大塚友恵 ２０１４「学校教育とＮＰＯ－犬山市立栗栖小学校での歴史教育プログラムの取組みについて－」『考古学セミナー あいちの考古学２０１４』

文献２：大塚友恵 ２０１９「犬山市立池野小学校 所蔵資料について」『研究紀要 邇波』第６号

文献３：赤塚次郎 ２０１９「上野古墳群と７世紀の邇波「前刀」」『研究紀要 邇波』第６号

文献４：犬山市教育委員会 １９６８ 犬山市埋蔵文化財調査報告『上野古墳群』

文献５：犬山市教育委員会 １９７３ 犬山市埋蔵文化財調査報告第３集『上野第５号墳』

文献６：犬山市教育委員会 １９７８ 犬山市埋蔵文化財調査報告第４集『上野第六号墳 岩神古墳 坂下第一号墳』

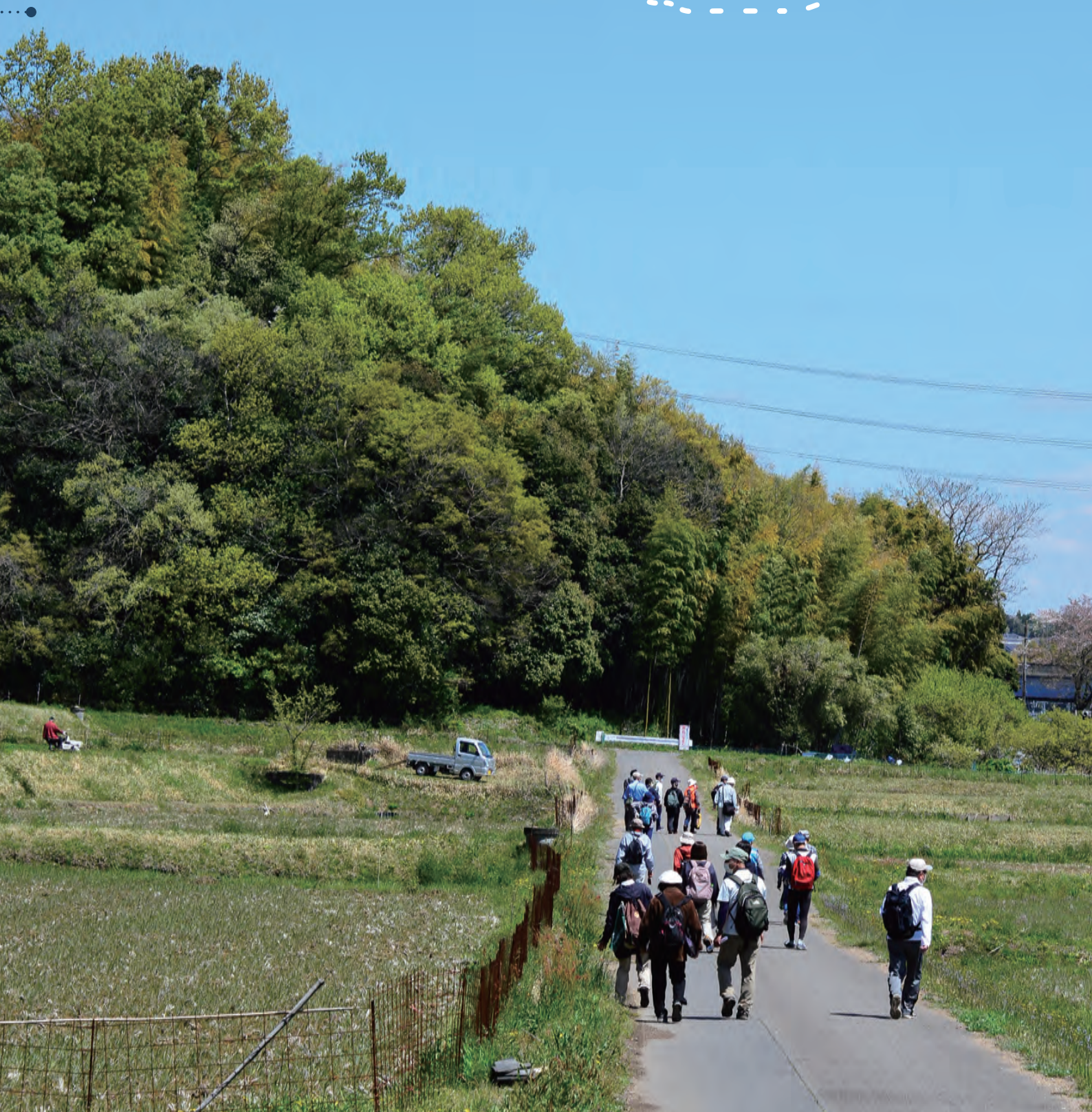
文献７：犬山市史編さん委員会 １９８３『犬山市史 史料編３』考古・古代・中世

文献８：愛知県史編さん委員会 ２０１５『愛知県史 別編窯業１ 古代猿投系』愛知県

新年度会員募集中

ニワ里ウォーキング「城東の文化財を歩く」
（令和３年４月１０日開催）

コロナ禍ではありますが、
今年度も活動をスタートしました！
皆さんのご参加を
お待ちしております。



ニワ里ねっと会員募集

ニワ里ねっとの活動に
参加いただける方
ご支援していただける方を
広く募集しています。
私たちと一緒に文化遺産を活かした
まちづくり活動に参加してみませんか？

会費

賛助会員 又は 正会員

個人・団体：１口　3,000 円

＊賛助会員（目的に賛同し援助するために入会した個人および団体）
＊＊正会員は「総会」への出席をお願いいたします。

会員特典

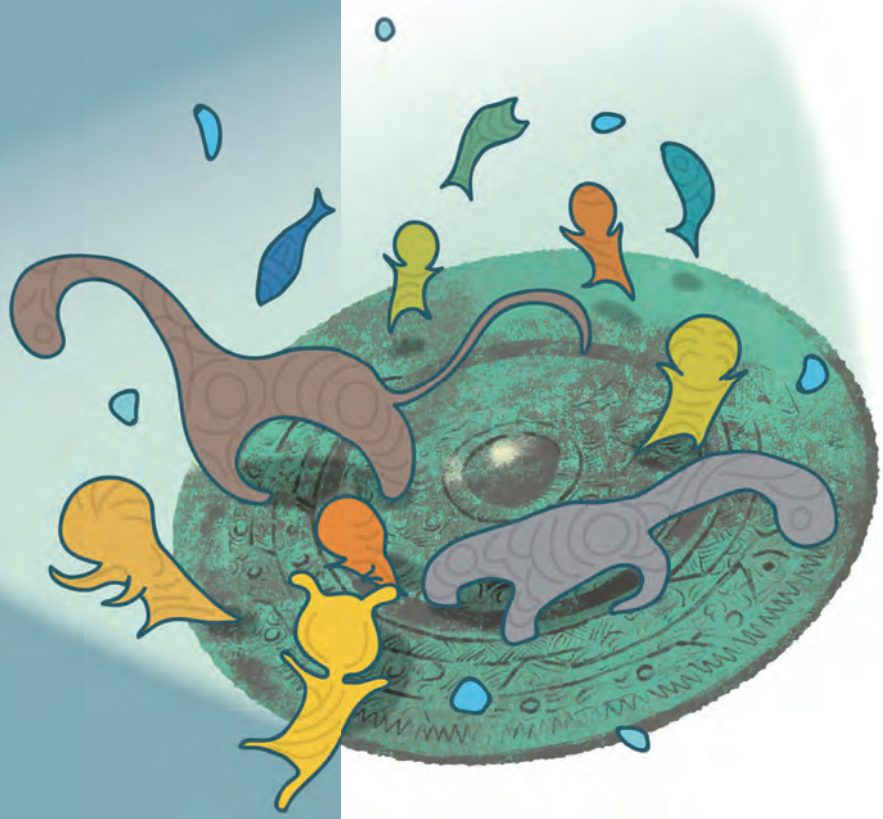
1．会員証の発行（裏面はスタンプカードになっています）
　イベントにご参加いただいてスタンプを集めると記念品を贈呈
2．会報「さとの四季だより」を年６回（隔月）お届け
3．ニワ里ねっと企画に会員料金でご参加
4．木之下城伝承館・堀部邸の優先利用権
　（座敷等半日無料利用権２回・貸切利用権１回）
5．研究紀要「邇波」を希望者に贈呈

入会申込の流れ

会員期間：５月の総会から翌年５月総会までの１年間
1）青塚古墳ガイダンス施設の窓口で受付
　申込書に必要事項をご記入いただき、年会費を添えてお申し込みください。
2）お振込（郵便振替口座）による受付
　新規会員様は通信欄に「新規賛助会員費」又は「新規会員費」、住所・氏名等をご明記ください。振込確認後、ご住所に会員証などを送付いたします。

【郵便振替口座】
口座番号　00850-9-198552
口座名称（漢字）　特定非営利活動法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
口座名称（カナ）　トクヒ）コダイニワノサト　ブンカイサンネットワーク

上記口座にて、寄付金も受付けております。
ニワ里ねっとの活動へのご支援をお願い申し上げます。



イラスト（山本彩乃）

▲ **東之宮古墳、冬至の日の出**（令和２年 12 月 20 日撮影）
史跡東之宮古墳が令和３年３月にグランドオープンしました。
昭和４８年の発掘調査からおよそ半世紀、新たな出発を迎えます。

木之下城伝承館・堀部邸も７期目を迎えました。
今年度から「みな蔵」さんが仲間に入り、素敵な空間になっています。

堀部邸第７期公開開始、提灯工房＆カフェ「みな蔵」もオープン！▼▶

【木之下城伝承館・堀部邸】
＊開館時間等が変更になりました。
開館時間：12:00 - 18:00
休 館 日　：月曜・火曜（祝日の場合はその翌日）
年末年始（12 月 28 日 - 1 月 4 日）

NPO 法人
古代邇波（にわ）の里・
文化遺産ネットワーク
（ニワ里ねっと）

木之下城伝承館・堀部邸
（NPO 事務所）
〒 484-0084
犬山市大字犬山字南古券 272
TEL:0568-90-3744
FAX:0568-90-3743

青塚古墳史跡公園
ガイダンス施設
〒 484-0945
犬山市字青塚 22-3
TEL:0568-68-2272

《ニワ里ねっと HP》
http://niwasato.net/home

《木之下城伝承館・堀部邸 HP》
http://horibetei.com

《FB》https://www.facebook.com/niwasatonet/
《twitter》https://twitter.com/niwasatonet

研究紀要　第８号

niwa 邇波

《編集・発行》
NPO 法人
古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
（ニワ里ねっと）

《写真》
中野 耕司、ニワ里ねっと事務局

《発行日》
令和３年５月１５日

東之宮古墳　雪景